

# 市民科学通信

## 2022年11月号

(通算30号)

2022年11月27日発行

発行: *NGO* 市民  
科学京都研究所

〒616-8012 京都市右京区谷口  
垣ノ内町5-8  
嵐電・龍安寺駅北東へ徒歩3分  
事務局 E-mail:  
sigemo.nao@gmail.com

## 目次

『反哲学入門』と交換様式論 —Tさんへ—	篠原 三郎	02
【追悼】篠原三郎先生と「市民の科学」	重本 冬水	05
【追悼文】篠原三郎さんは		
「アソシエーションニズムの科学」を提起する	中村 共一	08
【篠原三郎先生追悼エッセイ】		
『ベッドより』を拝読して —死と向き合われた最期の短歌—	真島 正臣	18
篠原三郎と柄谷行人 (1) —史的唯物論への疑問と未来への展望—	宮崎 昭	24
ぶらり、「霊」の旅 —柄谷行人『カと交換様式』をめぐる—	香椎 五郎	29
負け犬の遠吠え	塩小路橋宅三	35
イベントのお知らせ (Christmas マーケット)	ひとりごと	37
「グリーン・トランスフォーメーション戦略」とはなにか		
+NHKの姑息な世論調査	青水 司	38
ドイツ：政党を横断する社会運動の試み (序)	照井日出喜	41
個体的なもの私的なもの	竹内 真澄	46
【近況短信】ファンタジーにある「老い」		
—団地タクシー奮闘記(スーパー老人の巻)—	宮崎 昭	48
階級構成と個別者 Einzelne	竹内 真澄	50

# 『反哲学入門』と交換様式論

—T さんへ—

篠原三郎

Tさん おかわりありませんか。今夜はこんな話を持ち込みました。哲学研究者の木田元さん、かれの本はどの著書も専門家でもないわたしにも楽しいんですね。文章力というか表現というか、いやかれの生き方にいつもひかれるところがあるんです。小説を読んでいる気分になります。それがまた魅力的なんですね。氏の『わたしの哲学入門』（講談社学術文庫、2014年）などおすすめしたい一冊です。

ところが、木田さんがその著書『反哲学入門』（新潮文庫、2010年）で、夏目漱石の『夢十夜』の紹介をしていて、それに関わる鋭い指摘が妙にずっと気になっていたのです。それをめぐって展開していくTさんもあまり聞いたことのない、いわゆる「反哲学」にかかわることかもしれません。

Tさん

木田さんのこの本のなかにこんな話がでてくるのです。

「夏目漱石は『夢十夜』の第六夜のなかで、運慶がどうやってあの彫刻を産み出したのか、その秘訣を、木の中に埋まっている眉や鼻を、鑿の力で土のなかから石を掘り出すように掘り出すという言い方で述べています。この考え方は、自然のままを尊び、人為を否定する日本人の芸術観の典型です。しかし、この話は、明治の木にはどうてい仁王や埋まっていないことを悟るという皮肉な結末を与えられています。

漱石は鋭敏な芸術家の感性で、西洋化された日本では、かつてもっていた美質である「自然」そのままという芸術が成り立たなくなっていたことを感じ取っていたのではないのでしょうか。先駆者として、西洋と東洋という問題に深刻に悩んだ漱石は、明治という時代の味わった変化の本質を、たった一夜の夢として表現したわけです。

ところが、西洋では、漱石が感じ取った変化がすでに遠い昔、古代ギリシアで起こっていました。その根本的転換を惹き起こした張本人には、いうまでもなく、ソクラテスとプラトンという西洋哲学の始祖です」（66～67 ページ）。

Tさん どうでしょう。哲学の専門家木田元さんが哲学者でありながら、他方で反哲学を提唱したり、ある種のパラドックスがみられるのです。この本態は、なんと理解すべきか、という思いがずっとあったんですが、例の柄谷行人さんの交換様式に関係があるのではないかと、思われる接点もあり、目下思索しています。Tさん あとで？

Tさん 漱石の『夢十夜』の話から始まってしまったんですが、その前に西欧の独自の文化の上につくられた哲学の叙述が長くあるのです。それを先ず引用しますので、文字通り長くありますが、ご寛容ください。

いつも言っているように、自分のための引用なんですから、気になさらないでください。木

田さんはこう語ります。

「哲学を不幸な病気だと考えることが、わたしにとっては「哲学とはなにか」を考えてゆく上での出発点になっているのかもしれませんが。よく、日本には哲学がないからだめだ、といったふうなことを言う人がいますね。しかし、わたしは、日本の西欧流のいわゆる「哲学」がなかったことは、とてもいいことだと思っています。たしかに日本にも、人生観・道徳思想・宗教思想といったものはありました。そして、西洋でもこうしたものが哲学の材料にはなっていますが、これがそのまま哲学だというわけではありません」（22ページ）。

「哲学」という言葉の由来や性格や意味についてはあとでゆっくり考えなければなりません。いま哲学とは、そうした人生観・道徳思想・宗教思想といった材料を組みこむ特定の考え方だということにしておきましょう。あるいは、哲学とは、「ありとあらゆるもの（あるとされるあらゆるもの、存在するもの全体）がなんであり、どういうあり方をしているのか」ということについての特定の考え方、切り縮めて言えば「ある」ということがどういうことかについての特定の考え方だと言ってもいいと思います」（22～23ページ）。

どうしてこういう哲学が西洋文化圏で生まれたか、木田さんはこう説明されます。

「こうした考え方が、西洋という文化圏には生まれたが、日本には生まれなかった。いや、日本だけでなく、西洋以外の他の文化圏には生まれませんでした。というのも、そんな考え方をしうるためには、自分たちが存在するものの全体のうちにいながら、その全体を見渡すことのできる特別な位置に立つことができると思わなければならないからです」（23ページ）。

「いま、「存在するものの全体」を「自然」と呼ぶとすると、自分がそうした自然を超えた「超自然的な存在」だと思うか、少なくともそうした「超自然的存在」と関わりをもちうる特別な存在だと思わなければ、存在するものの全体がなんであるのかなどという問いは立てられないでしょう。自分が自然のなかにすっぽり包まれて生きてると信じ切っていた日本には、そんな問いは立てられないし、立てる必要もありませんでした。西洋という文化圏だけが超自然的な原理を立てて、それを参照しながら自然を見るという特殊な見方、考え方をしたのであり、その思考法が哲学と呼ばれたのだと思います」（23～24ページ）。

より具体的にはこんな状況が生まれてくるようです。

「そうした哲学の見方からすると、自然は超自然的原理——その呼び名は「イデア」「純粹形相」「神」「理性」「精神」とさまざまに変わりますが——によって形を与えられ制作される単なる材料になってしまいます。もはや、自然は生きたものではなく、超自然的原理の設定と物質的自然観の成立は連動しています。

しかし、自然とは、もともと文字通りおのずから生成していくもの、生きて生成していくものです。それが、超自然的原理を設定し、それに準拠してものを考える哲学のもとでは、制作のための死せる材料になってしまう。そういう意味で哲学は自然を限定し否定してみる反自然的で不自然なものの考え方ということになります。

先ほど、わたしは「哲学」を否定的なものとしてしか考えられないと言いました。いったい、哲学はなにを否定しているのでしょうか。やはり、自然に生きたり、考えたりすることを否定しているのだと思います。ですから、日本に哲学がなかったからといって恥じる必要はないのです。むしろ日本人のものの考え方がずっと自然だったということになりそうです」（24ページ）。

くどいようですが、Tさん つづけます。

「むろん、西洋でもはじめからそれは反自然的な考え方をしていただけではありません。古代ギリシャの早い時期、通常「ソクラテス以前の思想家たち」（前六—前五世紀）と呼ばれているアナクシマンドロスやヘラクレイトスらの活躍した時代のギリシャ人は、そんな反自然的な考え方をしていなかったようです。自然がすべてだと考え、万物は自然だとみていました」（25 ページ）。

「プラトン以来西洋という文化圏では—かなり時間をかけてのことですが—超自然的な原理を参照にして自然を見るという特異な思考様式が伝統になりました」（25 ページ）。

「その原理の呼び名は、さまざま変わりますが、その思考様式だけは連綿と受け継がれます」（25 ページ）。

しかしTさん 「十九世紀後半、ニーチェがこのことに気づきました。・・・中略・・・ニーチェは、西洋文化形成の根底に据えられたそうした思考法が無効になったということ「神は死せり」という言葉で宣言しました。・・・中略・・・目前にあったヨーロッパ文化の危機を打開しようとした。

ハイデガーやメルロ＝ポンティやデリダといった二十世紀の思想家はすべて、多少なりともそうしたニーチェの志向を受け継ごうとしています。ニーチェにとって「哲学」は超自然的思考を意味し—ニーチェは「プラトニズム（プラトン主義）」とも呼ばれています、—それが彼のほんとうのねらいでした。つまり、彼は「哲学批判」「哲学の解体」「反哲学」を提唱しようとしていたのです。もっとも、「反哲学」なんていう言葉を使うのは、メルロ＝ポンティだけです（26 ページ）。

以上、文字通り、引用してきた木田さんの「反哲学」論、柄谷さんの交換様式論から読み解くと、Tさん どうなると思いますか。

じつは、『反哲学入門』を読み終えて、柄谷さんの例の『世界共和国へ—資本＝ネーション＝国家を超えて』（岩波新書、2006年）を読み直してみたいです。

なにか木田さんに笑いだしたくなる点もあり、楽しくなってます。木田さんがもしも柄谷さんと接点があり、交換様式論を読んでいたなら、ずいぶん違った理解を示せたのではないかと残念に思えてならない今夜です。ともあれ、木田さんには、なぜ、こういう事態が生じたのか、そのなぜの姿勢が十二分にはいっこうに見られませんでした。したがって、その展開になにかトートロジーが働いているようでもありませんでした。ちなみに、柄谷さんは肩書に評論家とか、哲学者と名づけていますが、預言者にでも代えたらどうなんでしょうか。

もう少し長生きすれば接点も生まれたるかも夢のまた夢

2022年11月1日、記  
(しのはら さぶろう)

## 【追悼】

# 篠原三郎先生と「市民の科学」

重本冬水

11月4日、NGO市民科学京都研究所所員である篠原三郎先生が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

篠原先生は、『市民の科学』創刊号（2009年）の巻頭で「『苦海浄土』の『魂』に学ぶ」の原稿を寄せられました。そこで、石牟礼道子さんの水俣での「私の周りの年寄りたちは子どもを褒める時に『おまえは魂の深か子じゃね』と言うんです。『勉強ができるそうだね』とは言わない」をとりあげられました。チッソのこのことのみならず、鹿児島国際大学事件のことにもふれながら大学を含む現代社会の人間状況を「崖っ縁に立たされている」と述べ、「『魂』を読み取れるような『市民科学』者となれるよう、努めなくてはと激しく感じられるのです」と書かれました。それは、現在の知識の体系、方法、レトリックといった近現代の学問そのもののあり様を問う「市民科学」の提唱という呼びかけでした。“魂を読み取れる「市民科学」”をという先生の思いをあらためて受けとめたいと思います。

この呼びかけは、厳しい闘病生活にもかかわらず柄谷行人『力と交換様式』が10月上旬に刊行されるとすぐに購入され、400ページを超える難解な大著を読了され、さらに原稿を執筆されたことにつながっています。「市民科学通信」10月号には『力と交換様式』に関する2本の原稿を執筆され、さらに11月号の原稿として「『反哲学入門』と交換様式論—Tさんへ—」（2022年11月1日付原稿）が亡くなられる直前に私の手元に届きました。激しい病苦にもかかわらず最後まで格闘されました。研究者としての「魂」と気迫を感じます。棺には『力と交換様式』の本が入れられ、今も先生は「魂を読み取れる市民科学」の研究を続けられていると思います。

篠原先生は、大学問題を含め市民的・組合的活動・実践に、若い頃から亡くなるまで積極的に取り組まれました。21世紀に入って、先生は鹿児島国際大学事件全国連絡会の代表、大学評価学会の最初の呼びかけ人（田中昌人先生、池内了先生と共に）、市民科学研究所（現在、NGO市民科学京都研究所）の顧問などが、私には印象深く想い起されます。その活動・実践、それを支えた思想と理論において、柄谷行人を超えた市民の科学者として生き続けられたと思います。篠原三郎先生にあらためて深甚なる敬意を表します。

今もまた 共同研究 「かの地」での 先生との 議論が続く

2022年11月23日、記；冬水

（しげもと とうすい）

## 追記；篠原三郎先生と私・・・重本直利

1976年4月に立命館大学大学院経営学研究科修士課程に入学した私は篠原先生の授業を受けました。ただ、当初の指導教員は別の先生でした。7月になって私は指導教員の変更を申し出ました。異例中の異例でしたが認められ、9月から篠原先生が指導教員となりました（このことを可能にしたのは当時の大学院カリキュラムの運営が院生中心で行われていたからだとは思っています）。

入学当初、篠原先生の授業で使われたテキストの一つに藤田勇『法と経済の一般理論』があります。理系出身の私はこのテキストの論理展開の仕方、その表現の難解さに戸惑いました。授業での先生と他の院生との質疑応答、議論、その専門用語の豊富さ、多彩な弁舌に私は入っていくことが出来ませんでした。大学時代の物理学のゼミでも議論は行っていましたが、黒板に書かれた数式に向き合い、「沈黙」が続くことがよくありました。この理系の「大気圏」から抜け出せておらず、社系の「大気圏」に入るには時間と努力が必要でした。上記のテキストを何度も読み返して、ようやく理解できるといった劣等生でした。授業での私の「沈黙」は1年ほど続きました。ただ、特にこの1年は授業に出席することは実に楽しい時間でした。聞いているだけでも、あらたな学びと発見がいつもあったからです。先生同士が論争する人文研の共同研究会（特に管理の二重性論争）は実に刺激的で多くを学ぶことができました。「論争の場」があることは若手にとって実に貴重です。

1年の終わり頃には、修論テーマをマックス・ヴェーバーの産業官僚制論として、少しずつ取り組みはじめていました。マルクス主義研究者のヴェーバー批判はあたっていないのではないかと、特にヴェーバーの重要な指摘を捉えていないのではないかとという疑問をもち、その内容の整理を試みました。私の研究報告に対する批判は多く出されました。終了後、他の院生から慰めてもらうほどでしたが、批判によって「次の報告は頑張ろう！」という思いだけで、落ち込むことは全くありませんでした。無知故の怖いもの知らずの元理系の院生でした。だが当時では、特に立命館大学では、それは大それたテーマでした。もちろん、篠原先生の教示から選んだテーマでした。一橋大学出身の篠原先生は高島善哉さんの下で研究されていたこともあって、私は高島さんの『マルクスとヴェーバー—人間、社会および認識の方法—』からも学んでいました。篠原先生の思想と理論は『現代管理論批判』（1978年）でまとめられましたが、先生の「管理の二重性論」、特に生産力論には大きな影響を受けました。科学、技術それ自体の歴史性・社会性の把握は、理系の私には大きな衝撃でした。故竹内貞雄さん（『市民の科学』元編集長、元福井県立大学経済学部教授）も、この篠原先生の本に強い影響を受け、工学博士として工学部で勤務・研究され、科研費も含め研究費を潤沢に得られていましたが、それらを辞し、1986年に社会科学（管理技術論、疎外論）に転進されました。竹内さんも篠原先生の「門下生」です。

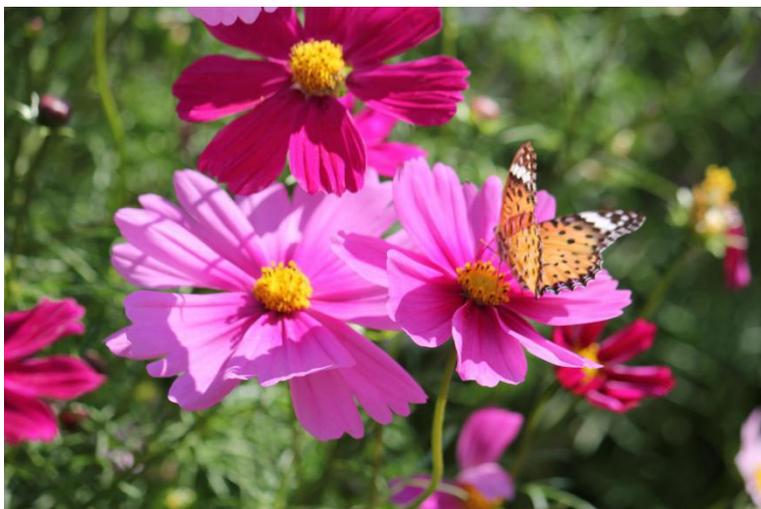
理系出身の劣等生の私は、先生から丁寧な指導をいただき、また励ましていただきました。そのお蔭でようやく修論を書くことができました。このテーマは、その後の私の研究の基礎となり、今も続いています。私の柄谷理論の研究もその延長線上にあります。先生の授業ではテキストとして文学書もありました。大原富枝の『婉という女』であったと思います。先生の研究スタンスの広さに魅かれていました。博士課程2年になる時に先生は静岡に移られましたので指導いただいたのは3年でしたが、実に貴重な充実した3年間でした。・・・休みの日、愛宕山に篠原ゼミで先生と一緒に登り、その急な登山道にもかかわらず先生の足取りは軽やかで、院生は息を切らせながら後をついていきました。先生の傍で登っている時は、研究内容での話となり、この会話は楽しい思い出ですが、息を切らせながらの会話は内容的にもたいへんでした。下山後の皆で飲むビールは実においしかったことも懐かしい思い出です。近江八幡にも行きま

した。学会の折にはその地の散策などを思い出します（高山、ニセコ、小樽、山梨など）。鹿児島には先生と共によく行きました（鹿児島国際大学事件と研究会で）。

大学院入学以来、46年間にわたって、共同研究会、著書、雑誌の編集・発行など、様々な機会でご教示いただいたことは幸運でした。研究合宿で歌人でもある先生が主宰する「歌会」での私の作歌の試みは冷や汗ものでした。“南京もアウシュビッツも戦後まで知らざりきいまなにを知らざる”（『キャンパスの四季』みずち書房、先生の最初の歌集）の短歌は「知らざる」ことを知らされました。2007年～2018年の間、龍谷大学社会科学研究所の3つの共同研究プロジェクトに連続してご参加いただき、終始、共同研究を導いていただいたことは実に幸運なことでした。研究会後の懇親会、さらにその後のコープイン京都ロビーでの恒例の団欒、懐かしい思い出です。この成果は『社会経営学研究』、『ディーセント・マネジメント研究』、『社会共生学研究』の三著として刊行できました。『社会共生学研究』の編集会議は2017年夏、先生のご自宅でした（中村共一さんと三人で）。

この共同研究プロジェクトの後も、ご逝去の前まで柄谷理論を含め共同研究を続けることができました。よく利用しました静岡もくせい会館での共同研究会の翌日に、何度か清水港に行き、先生のおすすめの店でおいしいまぐろを食べたことがありました。静岡研究会での思い出は、伊豆長岡・弘法の湯、興津駅近くの清見寺からの眺め、丸子宿の丁子屋のとろろじる、登呂遺跡、芹沢銈介美術館、家具職人しのはら（御子息の工房）などが浮かんできます。そして2022年6月12日のNGO市民科学京都研究所「読書会」の後のガーデンホテル静岡での食事会……。今となってはこれが先生との「最後の晚餐」でした。46年前の篠原先生との出会いによって、その後の私の歩みは、幸運という他ありません。故竹内貞雄さんもそう思っていることでしょう。……。この続きは2023年1月29日の「篠原三郎先生を偲ぶ会」（第20回市民科学研究会）にて。

（しげもと なおとし）



## 【追悼文】

# 篠原三郎さんは「アソシエーション ニズムの科学」を提起する

中村共一

先生の「死」は、残念至極であり、大きな悲しみです。

死の直前まで、社会問題と格闘し、わたしたちとの対話を絶たなかったその生き方は、個人の倫理の大事さを実践し、教えるものでした。国家の暴力が横行し、社会が荒廃するなかにあって、「倫理的思想家」でありつづけた先生の「死」は、かけがいのない「司令塔」を失ったようで無念でなりません。

しかし、先生の「死」は、たんなる「過去」（思い出）となるものではありません。わたしたちの社会運動のなかでくりかえし回帰する「霊」として蘇ってくるように思います。というのも、先生の生き方は、ラディカルな社会運動そのものであったからです。

この追悼文では、自分流にならざるをえませんが、篠原先生の軌跡を振り返りながら、先生がわたしたちに残したものを綴ってみたいと思います。

—

僕は、先生が立命館大学に赴任（1972年）され、開講された経営学部三年生の「篠原ゼミ」（資本論第三巻を読む）を選択し、先生と出会うことになりました。そのなかで、たびたび質問を投げかけ、先生のご自宅まで押しかけることになったわけですが、最初に訪問したときの話題が、富士見市の革新自治体の誕生の話であり、それを支えた万葉集やボーヴォワールの市民研究会の話でした。市民一人ひとりの政治活動といった新しい世界が拓かれてくるようでした。その後、僕が「マルクス主義」に悩んでいたせいなのか、いつも個人の社会性・歴史性、個人の自由に関する話題であったように思います。そんなふうに、大学時代から今日に至るまで、たくさんの「指導」を受けたわけですが、いまだに僕の方がその指導に報いることができず、忸怩たる思いがあります。

篠原先生の軌跡は、「履歴書」で理解することは不可能です。自由な精神と多彩な足跡を残しているからです。もちろん、研究活動には、『批判的経営学』（同文館、1972年）、『現代管理論批判』（新評論、1978年）、『現代管理社会論の展望 現代を見る眼—物象化を超えて』（こうち書房、1994年）、『“大学教授”ヴェーバーと“ホームレス”マルクス Tさんへ 「現代社会論ノート」』（晃洋書房、2015年）などがあり、いずれも独創的で、いまなおその価値を失っていません。その内容の一端はあとで触れますが、いわば、それらは、「古典的価値」が与えられてよいと思います。

しかし、研究の価値を、著書からだけで理解することは到底できません。多くの論文や共同研

究活動にも先生の思想が優位しているからです。たとえば、後者においては、多くの共著のなかに院生との共同研究によって編んだ四部作（『経営学における現代』1982年、『「経済大国」の経営学』1988年、『地球社会の経営学』1991年、『市場社会の未来』1999年）<sup>1)</sup>があります。研究者同志の共同研究活動としてというより、若手研究者を積極的に育てようとした共同作品です。もちろん「指導・非指導」の関係にあったわけですが、「弟子」たちの自由なテーマや議論を尊重してつくられたものです。蛇足ながら、この共同研究は、全国各地をめぐる「研究会合宿」をベースにしていたのですが、先生が「カリスマ旅行コンダクター」を兼ねていたこともあり、地域の歴史や伝統的な特産物を深く知る機会ともなりました。私たち若手研究者は、これらによって社会批判の眼が鍛えられ、のちの共同研究活動の礎になったように思います。

研究活動としてもう一つ挙げなくてはならないのが、重本直利さんによって組織・運営された「重本プロジェクト」（2007年～2018年）です。この共同研究は、重本さんの方から詳しく知ることになるかと思いますが、研究活動も「大学人の共同研究」から「市民の共同研究」に変わっています。この成果は、重本直利編『社会経営学研究——経済競争的経営から社会共生的研究へ』（2011年）、重本直利編『ディーセント・マネジメント研究——労働統合・共生経営の方法』（2015年）、重本直利・篠原三郎・中村共一編『社会共生学研究——いかに資本主義をマネジメントするか』（2018年）の三冊<sup>2)</sup>に結実しています。篠原先生も、この研究会に積極的に係われ、後の「市民科学研究会」（2009年～）とともに、市民科学研究のあり方を主導されています。また、先生自身も「後期篠原三郎」に飛躍していく「場」となっていたようにも思います。

## 二

論文の特徴としては、理論的にみれば、『批判的経営学』をはじめとする著書に表現され、「マルクス主義」や「史的唯物論」の影響下にあった通説的な諸理論を批判的に検討していく点に特徴がありました。この点は後でも触れますが、形式的な特徴をみれば、つねに論争的であり、批判的です。その批判も、「批判経営学」のようなたんなる理論批判ではなく、「批判的理論」を構築していこうとするものでした。したがって、一つひとつの論文は、つねに「他者」とのコミュニケーションのなかにありました。科学研究の発展が、そもそも共同研究においてしか成立しないと考えられていたからでしょう。常にだれかと議論しているような印象がありました。論文を通じた討議のなかに「科学的な理論」の社会的発展を希求していたとも言えます。この論文スタイルが、最も特徴的に現れているのは、「Tくんへ」という手紙形式をとった論文です。この形式は、大学教師となった当初からありました。が、「後期篠原三郎」では、最も一般的な形式となり、先生のコミュニケーションスタイルともなりました。

また、「私信」としての手紙も、たんなる「交際手段」ではありませんでした。私信としての「手紙」も、思い起こしてみれば、その一つひとつが、自分の生き方を反省していく契機となり、捨てがたい「宝物」のようでした。僕もたくさんの手紙を頂き、段ボールいっぱいになっています。様々な人たちに宛てた、すべての手紙を数えたら一体どれほどになるのでしょうか。僕にもわかりませんが、たぶん「星の数」という表現がピッタリします。この「手紙」は、大学教員を退職したあと、格段に多くなったように思いますが、それは他に表現手段がなかったからではありません。個々人の社会活動を興味深く受け止め、その「交通」を起点にあらたな社会関係をつかっていく「運動」と考えられていたのではないか。そう思えるのです。なので、「私信」としての手紙も、実は、「手紙形式をとった論文」であったといえます。というより、そもそも「論文」は生き方を考えるためにあるわけで、研究活動の原点は、むしろ「手紙にある」（他者との関係）と考えられていたと受け止めるべきかもしれません。

そうすると、篠原先生の「歌人」としての創作活動も、日常的になされ、膨大な数に及ぶ作品

を残していますが、それを単純に「趣味」・「特技」と受け止めては、その活動を理解したことになりません。先生の歌集である『キャンパスの四季』『教師稼業』『歴史とともに』<sup>3)</sup>にみられるように、芸術論への批判的理論を構築しつつ、現代の社会的・歴史的状況を想像的(=創造的)に批判していく「歌」として詠まれていたことを見逃していけないのです。朝日歌壇に「常連」のように掲載されていた先生の歌が、ある時から掲載が敬遠されるようになりました。なぜなのか。僕には朝日新聞の「変節」(右傾化)がそこにあったように感じていますが、それとともに選者たちを超える創作があったからではないかと推測しています。ともあれ、先生は、発表の場を選びません。創作活動が衰えることなく、むしろ「社会運動」としてさらに活動を広げていったように思います。私たちが手にした「私信」にも、かならず短歌が添えられていました。それも数えれば、「星の数」の倍ぐらいなるでしょう。

こうした篠原先生の「姿勢」をいかに受け止めるべきか。このことを考えていくためにも、さらに、先生の研究活動の内容に眼を向けていきます。

### 三

篠原先生の研究論文は、その一つひとつが自由で斬新な「知的発見」であり、篠原理論の創造につながるものでした。と同時に、その理論は、つねに人間の生き方を問いかけ、その意義を明らかにしていくものとしてありました。

いま、便宜的に、篠原先生の社会活動を、「初期」(大学教師以前)、「中期」(大学教師時代)、「後期」(大学退職後)に分けて考えてみます。ただ、便宜的とはいえ、すでに「後期篠原三郎」と表現してきましたように、「中期」と「後期」の間には、先生の研究活動のあり方を大きく左右する、社会的・歴史的な「転換」がありました。グローバリゼーションが進行し、戦後の福祉国家体制が解体され、「ネーション」(「想像の共同体」)が失われていく社会変容です。そこでは、社会内の様々な分野で、新自由主義的な経済効率主義が貫かれ、福祉、大学、そして芸術の分野まで「互酬的な公共性」の「危機」に直面することになりました。「文学の終焉」や「学問の危機」「大学の解体」が叫ばれはじめたのも、この歴史的变化に起因しています。身近なところでも、鹿児島国際大学三教授解雇事件(2002年)をはじめ国公立大学の差別・解雇事件が多発していました<sup>4)</sup>。ですので、2000年前後から、どんな形(保守的、革新的)であれ、研究者の研究活動のあり方も変わらざるをえませんでした。

篠原先生は、こうした変化のなかで、既成の大学・学問・研究者のあり方の「墮落」を批判しながら、自らの思想と科学を発展させていきます。したがって、「中期」の研究と「後期」の研究では、後にみるように一貫性がありつつも、大きな変化があるように思います。

「中期」の研究活動を振り返ってみますと、『批判的経営学』といはいうものの、たんなる「批判経営学」ではなく、本質的には「批判的理論」の創造という点にありました。これは『現代管理理論批判』、『現代管理社会論の展望』においても貫いている点です。1994年に出版された『現代管理社会論の展望』が、いかなるスタンスで論じられたのか、みてみましょう。

「現代社会が今日、なぜ、ことさら管理社会とされるのであろうか」という課題を提示し、「このような問題を解明していくためにも、現代の社会的本質を、まず的確に捉えていくことが必要であろう。しかし、だれもが現実を正しく解明しようとしながら、得心のいくようには、かならずしも、うまくいっているとはかぎらない。であれば、どうすればいいのか、いかなる方法が求められるべきものなのだろうか。これまでの到達点に多く学びながらも、反省を覚えつつ、現代社会の分析に方法論から挑もうとしたのが本書の出発点である」<sup>5)</sup>。と述べられています。整理して言えば、①「現代の社会的本質を、まず的確に捉えていくこと」の重要性を指摘しながら、②「だれもが現実を正しく解明しようとしながら、得心のいくようには、かならずしも、うまく

いっているとはかぎらない」点があることを反省しつつ、③「いかなる方法が求められるべき」か、を検討するのが「本書」だと説明されています。

『現代管理社会論の展望』の論点は、大きくみて、「第一部 現代資本主義と株式会社の展開」、「第二部 官僚制の歴史性」、「第三部 管理の二重性」、「第四部 商品経済と生産力」として解明されていくのですが、それらを捉えていく基本的な視座が「社会を管理体系としてみたときの資本主義の特徴」<sup>6)</sup>を捉えていく点にあり、それにより諸論点が解明され、「この社会が管理社会と言われる所以と背景」が明らかにされるものとなります。実は、ここに篠原理論の心髄があります。対象としては、『現代管理論批判』で対象とされた企業経営から、さらにその対象が拡大され、「社会を管理体系として」みたときの社会、そしてまたその管理体系の歴史的形態に迫ろうとするのです。また、方法論的には、資本主義のメカニズム、さらに「資本主義の変貌」に規定された「管理体系」の歴史的な性格を明らかにしていく方法がとられています。「管理体系」はいずれの社会にもあるものと一般的に捉え、管理問題はそれを歴史的に規定する資本主義のメカニズムによって規定された歴史的な形態にあると主張されているのです。こうした把握により、「はじめて、冒頭に提起した課題である現代社会の分析を有効にさせることが可能となるし、さらには、将来社会に向かって、わたくしたちが何をなすべきか、の展望も抽象的ではあるが、開かれていく」<sup>7)</sup>と考えられているのです。物象支配を超えた「人間の主体化」という結論は、こうした理論によって明らかにされてくる「展望」としてあります。「所有のあり方」により社会主義を捉える通説と異なって、人間（近代人）の歴史的な存在様式を批判的に捉えることによって、「人間の主体化」を捉えようとするのは、いかにも篠原先生らしく、また斬新な問題提起であったように思います。

『現代管理社会論の展望』は、それまでの篠原理論の延長線上にあり、「中期篠原三郎」の最も代表的な作品といえます。ただ、ここで補足しておきたいのは、その著書のなかで、篠原理論がラディカルな批判的理論として提起されてくる際、批判的な検討の対象となったのが、通説的な史的唯物論です。そこでの「管理規定の問題」は「『資本論』次元にとどまりえず、生産力論、生産力と生産関係、上部構造と土台、といった諸問題にかかわって議論される史的唯物論の限界性」<sup>7)</sup>と関連し、そこを問題とするものでした。とりわけ、通説の歴史貫通的な「生産力」把握に対して「生産力の歴史性」の問題を提起した篠原理論は、生産力問題を解いていく重要な問題提起となったはずですが、学会では無視されることが多かったようです。しかし、グローバルな環境破壊の解決が進展しない現状を思い浮かべてみれば、いまなお有効な理論として評価されるべき学説ではないかと思えます。

#### 四

1990年代のグローバリゼーション（帝国主義）の進展は、しだいに戦争、経済格差、環境破壊といったグローバルな問題を深刻化させ、人類の危機をもたらしました。資本主義諸国においても、戦後の「福祉国家」や民主主義を解体する新自由主義の登場は、一方であらゆる社会領域に経済効率主義を蔓延させ、他方で社会を分断——例えば、貧富の拡大、正規労働者と非正規労働者との雇用格差——し、女性・年齢・民族・障がいなどにおける差別を拡大させるものでした。

そうしたなかで、研究者の「倫理」問題をおもく受け止め、倫理的思想を徹底していく「後期篠原三郎」が登場してきたように思えます。この「後期」への移行には、競争と効率を重視する「大学の再編」がすすめられながらも、大学教職員の対抗運動もなく、無責任に「学問の自由」や「大学自治」が破壊されていった状況があります。とりわけ、先生も積極的に支援活動に奔走した鹿児島国際大学三教授解雇事件の顛末は、大学（近代科学）への「失望」を感じさせるものとなり、逆に、「市民科学」の可能性を模索せざるをえなくしたように思います。また、先生の

理論的な転換のプロセスとしては、僕にも明確に掴めていないのですが、すくなくともフェミニズムの著書や、『倫理 21』（柄谷行人）、『社会経営学序説』（重本直利）、『苦海浄土』（石牟礼道子）、『文学とは何か』（T・イーグルトン）などが大きな刺激となっていたように見受けられます。なかでも、柄谷行人さんにはとりわけ大きな関心をよせ、柄谷理論との「交通」が「後期篠原三郎」の大きな特徴となってきました。

こうした先生の変化は、象徴的にみれば、『“大学教授”ウェーバーと“ホームレス”マルクス Tさんへ「現代社会論ノート」』（2015年）においてみることができます。同書は、「第一部 Tさんへの手紙——現代社会に思うこと」、「第二部 現代社会の視座をめぐって」からなっています。その第一部のタイトルに眼をやってみると、かつてと異なり、主題と副題が入れ替わっているのに気づきます。先ずは「他者」としての「Tさん」との関係が前面におかれ、そのうえで「現代社会の視座」が位置づけられているのです。そしてまた、第二部の内容としては、現代社会を捉えていく「視座」が倫理的な観点からリニューアルされて示されています。これらの内容は、Tさんに対して、第一部・第一章の「『犠牲のシステム』と現代の倫理——高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』のすすめ——」に述べられていくように、「現代社会」が「犠牲のシステム」としてあり、社会そのものが「現代の倫理」問題となっているのではないかと問いかけ、その解決を「他者」との「運動」において展望していくのです。あきらかに篠原先生は、主客が分離した「科学主義」ではなく、他者へ連帯する「倫理」を前面におき、「科学」もその「倫理」問題を解決していく「一翼」に位置づけられていくのです。

「Tさん それはともあれ、高橋さんの「犠牲のシステム」論を読みながら、『無責任の体系』ともなっているこのシステムから脱出していくためには、倫理における現代といった問題の、あるいは、現代の倫理のあり方をめぐる積極的な議論を抜きにしてはありえないのではないか、と、思えてならなくなったのです。」<sup>8)</sup>

このように語り、「現代社会」の「犠牲システム」ばかりでなく、さらに「大学教師の原罪」といった、現代社会のうちに生きる人間の「原罪」をとらえ、そこからの「脱出」を求められていくのです。そしてまた、「犠牲システム」からの脱出の方法について、こう語られています。

「Tさん にもかかわらず、現代資本主義の市場経済システムに囲まれ、依存し、生きていこうとすれば、『犠牲のシステム』を哀しいながら、反社会的に甘受していくことになるでしょう。そうでなければ、『犠牲のシステム』に対抗する、それに代わるべきあらたなシステムの構築が不可欠です。それがいかに難しいことであれ、いかなるものであるかを模索していくべき時代にあるのではないかと、しみじみ思うのです。対抗こそ現代にあるべき倫理かとも考えるのです。そのばあい、重要なことは、資本主義の市場経済システムとその論理のなかで失われてきた『犠牲にされるもの』の間の連帯をあたらしく構築していくことではないかと、考えるのです。」<sup>9)</sup>

『経済学・哲学草稿』においてマルクスが、「宗教や家族や国家や法や道徳や学問や芸術やその他は、生産活動の特殊な様式以上のものではなく、その一般的法則のもとに従属している」<sup>10)</sup>と捉えたのと同じように、篠原先生は、現代社会のあらゆる「生産活動」が、資本主義の市場経済システムとの関連で捉えられ、かつそれにより「犠牲にされるもの」を批判的に暴き出し、その犠牲者たちの自由な連帯によって「だれもが居心地よい人間社会」となる未来を希求されていくのです。すぐれて倫理的・実践的な提起として語られる「倫理的思想」が、そこにあります。と同時に、「第二部 現代社会の視座をめぐって」において、倫理的に分析する方法が新たに提示されていることを看過すべきではないでしょう。資本主義自体がもつ倫理的限界を解明してい

く「理論」として提示されているからです。この点、深く検討すべき意義を感じますが、別の機会に譲ることにします。

『“大学教授”ウェーバーと“ホームレス”マルクス』の第2章で、はじめて柄谷行人さんの著書（『倫理21』）が取り上げられますが、本格的には、「市民の科学」（第11号・2021年1月、第12号・2022年6月）や「市民科学通信」（第11号・2021年4月から第29号2022年10月）において、ほぼ毎回のごとく論及され、柄谷理論との「トランスクリティーク」が展開されています。そのなかで、篠原先生自身も、これまでの「批判的理論」の構築から「アソシエニズムの科学」——この呼称は、篠原先生ではなく私が付けたものです——へと「旋回」していったように思われます。

柄谷行人さんは、ソ連の崩壊、グローバリゼーションの進行のなかで、資本主義が生み出す「戦争・環境破壊・経済的格差」といった問題こそが、人類が「緊急に解決せねばならない課題」だと受け止めつつ、史的唯物論の再検討をともなう「交換様式論」の提起を通じて、その解決の展望を、資本や国家を超えていく「世界共和国」に見いだそうとしていました。篠原先生は、こうした柄谷理論を高く評価したうえで、自らの思想を「飛躍」させていったように思います。ここで、その全貌を説明していくわけにはいきませんが、「『柄谷行人』をTさんと読む」における先生の柄谷評価をみておきたいと思います。

マルクス『経済学批判』にある有名な「土台と上部構造」の叙述と関連して、「人間は常に自らを解決しうる問題のみを問題とする」との言葉——先生の好きなマルクスの一行です——があった点に注目しながら、次のように述べられています。

「マルクスの『序言』が主張された時代では、社会構成体をいわゆる『土台と上部構造』の区別、関連といった視点から認識し、問題化したこと自体、社会的にも歴史的にも大きな事件でもあったのではないのでしょうか。『マルクスの転回』の一端だったのでは、と推考しているのです。マルクスならではの超越論的な姿勢から提起されたものでしょう。

それがTさん ソ連圏が崩壊していく1990年代、それまで『土台』として語りつづけられてきた生産様式論から、『土台と上部構造』の理解を大きく変えた交換様式論へと旋回を求める柄谷さんの問題提起は、まさにエポックメイキングとしかいいようがありません。柄谷さんは、みずから問題とした問題をみずから解決したのです。これもまた『柄谷的転回』といってもいい事件です。そんなあれこれを考えさせてくれたのも、あのマルクスの一行の言葉です。

『マルクスその可能性の中心』から『トランスクリティーク』へ、20余年かけ熟成されていくなかでの心棒のようなものが、とりわけ『他者』問題がまた思想家としての柄谷さんが、大きく迫ってくるようでありませぬ。」<sup>11)</sup>

繰り返すと、「人間は常に自らを解決しうる問題のみを問題とする」という言葉が「マルクスならではの超越論的な姿勢」を表現するものであり、そのなかで「土台と上部構造」が語られていたと受け止めたうえで、それと同様に、歴史的な状況が「移動」するなかで、柄谷さんの「交換様式論」への旋回があったと評価されているのです。そしてまた、「『他者』問題がまた思想家としての柄谷さん」が、自らに大きく迫ってくると述べられています。柄谷理論のキーワードである「超越論的他者」概念が、篠原先生にとってみても、思想の「核心」となるのでしょうか。この点を強調するかのよう、さらに『トランスクリティーク』の第一章「カント的転回」の末尾にある、カントのいわゆる、三つの『批判』に対する柄谷さんの見方を紹介されています。肝心な点なので、ここでも引用しておきます。

「要するに、理論的・実践的・美的というような区別によって、カントが追求していた問

題を見逃してはならない。重要なのは、カントが『普遍性』を求めたとき、不可避免的に、『他者』を導入しなければならなかったこと、その他者は共同主観性や共通感覚において私と同一化できるような相手ではないということである。それは超越的な他者（神）ではなくて、超越論的な他者である。そのような他者は『相対主義』をもたらすのではなく、そのみが普遍性を可能にするのだ。そして、カントのそうした『批判』の徹底性は、彼が趣味判断における普遍性の問題、つまり『批判』の問題からはじめたことによるのである<sup>12)</sup>。

柄谷理論は、カントの哲学にこうした「他者」の問題を見だし、超越論的な交換様式論を提起したわけですが、篠原先生も、それを受け入れ、その上に立って「篠原的旋回」を遂げていったのだらうと思うのです。

## 五

今度は、柄谷理論から篠原理論を捉えなおしてみます。

柄谷行人さんは、『世界史の構造』（岩波書店、2015年）のなかで交換様式論を示されています。それを簡単に整理すると、社会（社会構成体）は、「生産様式」といった通説を踏まえ、越え、「交換様式」なる概念によって「社会構成体」一般の活動を、次のように捉えられています。

すなわち、交換様式は、「A」「B」「C」「D」の四つに区分し、「A」は「贈与と返礼」の交わされる「互酬」様式、「B」では「支配と保護」が遂行される「略取と再分配」様式、「C」には「貨幣と商品」が展開している「商品交換」様式、そしてこうした交換様式の結合体（「ボロメオの環」）から生まれ、それぞれの役割、権力、力を超えていくものとして交換様式「D」が措定されています。

近代社会では、交換様式が歴史的形態をとり、「A」は「ネーション」、「B」は「国家」、「C」は「資本」と捉えられ、「C」がこの社会を主導する位置にあるとします。いわば「他者支配」（労働力の商品化）にもとづいた資本主義の市場経済が、他の「他者支配」の形態としてある国家やネーション（想像の共同体）に影響を与えながら歴史的な社会を構成しているとみるのです。そしてまた、とりわけ「資本」の発展は「A」を劣化させ、社会の存続を危うくしていくことから、それらの支配を超える交換様式「D」が求められざるをえないとするのです。この「D」こそ、資本と国家を超える「X」なのですが、「A」の「高次元での回復」<sup>13)</sup>として、「社会主義」が想定されてくるものです。

篠原先生は、先にみたように、「管理体系」として近代社会を「資本主義としてのこの社会のメカニズム」（資本主義市場経済）を軸に「犠牲のシステム」と捉え、また、その限界状況を踏まえながら、資本主義を超える「社会主義」とは何かを考え、他者との科学運動を求めていました。ですので、基本的には、柄谷行人さんの思想と科学に通底する立場に立っていたと理解することができます。それゆえに、柄谷理論が与えるインパクトも大きかったのではないのでしょうか。

しかし、篠原先生は、たんに柄谷理論を受容したのではありません。むしろ、それを受け入れたうえで、さらに自らの思想を深めていったのではないかと思います。柄谷行人さんは、『世界史の構造』から『力と交換様式』という形で、自らの原理的な理論を集大成していくこととなります。それと並行しつつ、さらに、篠原先生は、『世界史の構造』で提起された「D」の提起を受け、「アソシエーションイズムともいわれる『交換様式 D』の世界を倫理的実践的に構想していかねばならない時代に私たちが生きている」<sup>14)</sup>と認識し、さらに「D」を実現していくアソシエーションの運動に目を移し、「倫理的思想」のあり方を探究されていきます。

柄谷行人さんが、「ネーションにおいては、現実の資本主義経済がもたらす格差、自由と平等の欠如が、想像的に補填され解消されています。また、ネーションにおいては、支配の装置であ

る国家とは異なる、互酬的な共同体が想像されています。こうして、ネーションは、国家と資本主義経済という異なる交換原理に立つものを想像的に総合するわけです<sup>15)</sup>と語ったことに対して、篠原先生は、次のように問い返されています。

「しかしTさん 柄谷さんがはっきりそう言いきれるのは（『理念と想像力なき時代』ではなく）『理念と想像力』があり、それがよく働くような社会的歴史的条件が前提されてのことではないでしょうか。」「けれども現実をおもうとき、資本主義経済がグローバルに圧倒的な力を持ち、国家もそれに寄り添うように機能し、可能なあらゆる手段や制度を利用し、ネーションもそれに見合うごとく形成されてきているのではないのでしょうか。それが現状ではないのでしょうか。そんなネーション、「想像的」な共同体どころか、わたしには『人工的』（ないしは『擬制的』）なそれにもみえてならないのです。」<sup>15)</sup>と述べられ、ネーションの歴史的な現状は、家族の互酬原理さえも解体されつつあり、ネーションの存在が「一義的にはみえない」点を踏まえながら、「しかし、こういうネーションステートの状態から脱けだし、アソシエーションイズムへ近づくためには、わたしたち、どうあるべきなのでしょう」<sup>15)</sup>。

また、柄谷さんの「世界共和国」論と関連して、「著書『世界共和国へ』でのこのコンテキストではネーションの交換様式と互酬性との原理的な関係を論じておかねばならなかったのですが、そして、それ自体、不可欠なことなのですが、それを前提としてですが、わたしは、さらに一步すすめて、想像の共同体としてのネーションの歴史を現実にも即した説明を加えていったらどうか」<sup>16)</sup>と積極的に問題提起されています。

さらに、テッサ・モーリス＝スズキさんが『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』で示された「批判的想像力」概念の意義を高く評価されながら、柄谷理論と関連づけ、アソシエーションイズムの「批判的想像力」について、次のように述べられています。

「ところでTさん わたしの関心は、そこでの『批判的想像力』における『想像』と、いわゆる交換様式論にいう互酬制を根底においた『想像の共同体』としてのネーションと言う際の『想像』というものの両者の関係なんです。後者は『ボロメオの環』の力による社会的歴史的な『想像』によって成ってきたものと捉えています。それに対する前者は、ネーションの一員、あるいは諸個人の協働、連係による想像力によって想像されたものではないでしょうか。このとき前者にとって肝要なことは、想像力の視座がどこに置かれているかです。想像力が批判的でラディカルであるためには、それがネーションの外に出て、いわばネーションを超えた普遍的な視座に立っていないなければならないということです。」<sup>17)</sup>

篠原先生は、こうして柄谷行人さんが提起した「互酬」の「高次元での回復」を、原理ではなく、「歴史の現実」という次元に「移動」させながら、「ネーションの外に出て、いわばネーションを超えた普遍的な視座」に立って、批判的に創造していく運動のあり方を考えられていくのです。したがって、篠原先生が与えた新たな課題は、以下のようなかたちで「解決」されることになります。

「要するに、アソシエーションイズムが『共同体にあった互酬性を高次元で取りかえそうとする運動』とは、社会的歴史的な存在である国民国家の想像の共同体であるネーションを理念的に普遍的に超えていくための日々の運動であり、倫理的な活動であると、わたし流に了解しようと思っているのです。」<sup>16)</sup>

柄谷行人さんは、新著『力と交換様式』で「社会主義の科学」を提起されました。この提起を受けるにあって、学生時代に、篠原先生に向けて「科学的社会主義って何ですか」と問いかけたことを思い出しました。その回答はともかく、その問いが、再び柄谷さんから投げられてびっくりしたのですが、考えてみれば、ロシア革命後の「社会主義」は、国家や官僚制による抑圧問題を解決できず、「社会主義」の名を汚すものとなっています。ソ連崩壊は当然のことでしょう。と同時に、あらためて「社会主義とはなにか」という問題が提起されているのも、確かです。資本主義の限界がますます明らかになってきた現状では、それを超える未来において、社会主義がふたたび「回帰」されてくるでしょう。まさに柄谷さんの提起は、無視されてはならない重要な提起というべきです。

と同時に、私には、篠原先生が提起した「アソシエーションイズムの科学」も、現在において不可欠な人類的課題ではないかと思えます。「ネーションの外から」、「批判的想像力」をもったアソシエーションイズムの運動を展開することなしに「D」（世界共和国）に近づいていくことはできないからです。そうであればこそ、篠原先生の軌跡をあらためて振り返ってみれば、「無意識」のアソシエーションイズム運動から「意識的」なそれに飛躍したプロセスだったように思うのです。研究論文であれ、手紙であれ、短歌であれ、そしてまた他の行動であれ、それらすべてが「アソシエーションイスト」を形づくっていく活動だったと見なすこともできるのです。だとすると、「アソシエーションイスト」としての篠原三郎さん自体を、「アソシエーションイズムの科学」の対象として学んでいくのも、その運動の一つになりうるように思えます。なぜ、篠原三郎はアソシエーションイストなのか。それを科学的に「解決」していくことは、私たち一人ひとりが自らのアソシエーションイズム運動を行なっていく「力」となるだろうと思えます。

最後に、篠原先生の短歌を掲げておきます。

肩書にアソシエーションイストと書き込めば然りと寄こす阿木津英<sup>18)</sup>

#### (注)

1) この4冊の著書は、以下の通りです。

篠原三郎編著『経営学における現代』有斐閣、1982年

篠原三郎編著『「経済大国」の経営学』有斐閣、1988年

篠原三郎編著『地球社会の経営学』ミネルヴァ書房、1991年

篠原三郎／中村共一編著『市場社会の未来』ミネルヴァ書房、1999年

2) 3冊とも、出版社は晃洋書房です。

3) 3冊の短歌集は以下の通りです。

篠原三郎『キャンパスの四季』みずち書房、1991年

篠原三郎『教師稼業』こうち書房、1994年

篠原三郎『歴史とともに』こぶし書房、2006年

4) WEBサイト「全国国公立大学の事件情報」を参照してください。

<http://university.main.jp/blog8/archives/cat7/>

5) 篠原三郎『現代管理社会論の展望』こうち書房、1994年、3-4頁

6) 篠原三郎、前掲書、4頁。

「社会の管理体系」は、一般的に、企業管理、社会管理（企業と企業の間を管理するもの）、国家管理から成るものと規定されています。

7) 篠原三郎、前掲書、6頁。

- 8) 篠原三郎、前掲書、7 頁。
- 9) 篠原三郎、前掲書、8 頁。
- 10) K. マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、132 頁。
- 11) 「市民の科学」第 11 号、2021 年 1 月、48 頁。
- 12) 柄谷行人『トランスクリティーク』岩波書店、80 頁。
- 13) 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、14 頁。

柄谷さんによれば、「A」の「高次元での回復」としての「D」は、「人間の願望や自由意思によるよりもむしろ、それらを越えた至上命令としてあらわれる」（同、23 頁）とも説明されています。しかし、その「至上命令」とアソシエーションニズムの運動はいかなる関係に立つのか、納得しうる説明があるようには思えません。この難点を解こうとしたのが、篠原先生だったのではないかと思います。

- 14) 篠原三郎「先便後、立ち止まり考える——T さんへ——」 「市民科学通信」第 17 号、2021 年 10 月。
- 15) 篠原三郎「ネーションからアソシエーションニズムへ——T さんへ——」 「市民科学通信」第 24 号、2022 年 5 月。
- 16) 篠原三郎「ネーションとナショナリズムと『批判的想像力』と——T さんへ——」 「市民科学通信」第 26 号、2022 年 7 月。
- 17) 篠原三郎「ネーションとナショナリズムと『批判的想像力』と——T さんへ——」 「市民科学通信」第 26 号、2022 年 7 月。
- 18) 篠原三郎「『ベットのなかより』——T さんへ——」 「市民科学通信」第 28 号、2022 年 9 月。

(なかむら きょういち)



# 【篠原三郎先生追悼エッセイ】

## 『ベッドより』を拝読して

### —死と向き合われた最期の短歌—

眞島正臣

#### 1. 短歌作者としての篠原先生の実績

篠原三郎先生の訃報を重本先生から知らされ、一か月ほど前に手紙でも、しっかりした短歌を書き込んでおられたのに早すぎるといふ心境であった。パソコンに残っている何時のものかわからない私の手紙文から、いつも励ましていただいた報恩感謝の追悼エッセイを書こうと考えた。

##### (1) 朝日新聞歌壇での活躍

・藤の花少しはなれて桐の花山の夫婦は茶摘みに忙し

篠原三郎

数年前のことだが、「朝日歌壇」馬場あき子選のコーナーに先生のお名前を見つけて手紙を書いたことがあった。

「拝啓 社会経営学共同研究会では、いつもお世話になります。「静岡市」の表示により、先生に、多分間違いはないと察しました。六月二日の朝日新聞に先生の入選作品を拝見しました。鮮やかで美しく、明るい空気がみなぎるところが選者の評価でしょうか。初夏の花の見られるそばで、茶摘をする夫婦の労働が歌われています。明るい光景であるとともに、環境のいい茶畑のような場所で働く夫婦の幸福感が伝わります。短歌をやっている人間として、喜ばしい思いで拝見しました。」

##### (2) 島田修二推奨の歌壇賞

今年の4月に私の所属する結社で100周年記念に過去の業績を振り返る祝賀の出版物が発刊された。私の短歌結社の先生で他界された大西公哉氏と江田島兵学校での同窓生島田修二氏について述べたコピーを篠原先生に送った。「わたしの朝日新聞社歌壇賞の推挙者でした」という返事をいただいた。大西先生の「ひとつ間違えばお互いに特攻隊に出動されて死んでいただろう」という戦中派の短歌を理解されての返信であった。朝日新聞歌壇賞の受賞が何時のことであったか正確なことは、お聞きしていない。

昨年であったか、静岡の行政が企画した短歌大会に応募され特賞を獲得された。

紛れもない短歌作者としての実力をお持ちであった。失礼ながら、日本語の表現力の骨格、足腰の正確さを先生の作品から感じてきた。毎回手紙に同封しお送りした拙作を恥ずかしい限りであると思ってきた。スルーすることなく目を通してくださった。目上の先生が感想を述べてくださるとは、稀有のことだいまでも思う。

### (3) 短歌結社誌『八雁』と篠原先生

「市民通信」9月号に掲載された「ベッドのなかより」の短歌に詠まれている阿木津英さんとは、親交がおりであった。『八雁』の主幹で、いつも私への手紙で褒めておられた。本年の6月30日付の手紙では、「彼女、九大では哲学専攻、ニーチェの研究をしてきました。フェミニストでもあります。歌を詠むだけでなく、いい論文、著書も書ける人です。」と紹介されていました。毎号の感想も送られていたようである。

かつては、篠原先生が、短歌評論のような連載もされていたのを拝読したことがある。21年11月号の『八雁』に掲載された連載エッセイ「櫻の木の下で」を阿木津英さんが書かれているので読みなさいと雑誌を送って来られた。この雑誌に便箋を小さく切り先生の自作の短歌を書いたものが挟まれていた。新聞への応募作品と異なる味わいの短歌である。紹介したい。

「こんなうたを最近よみました。

- ・今以てアウシュビッツなくならぬシリア内戦いつまでつづく
- ・稲刈りの園児の声の美しかり弥生の人未来を生きて」

園児たちの稲刈りを日本列島で米の生産を始めたという弥生人に思いを飛ばせた意外性がユニークである。

新聞歌壇に応募される作品とは、違う傾向の社会詠を書いていたが、わが国の政治批判をノートに記述するように率直に詠んでおられた。残念ながら先生の創作動機をお尋ねしていない。大河ドラマが明智光秀を主人公にしていた時期の手紙の往還であった。静岡在住で大学の同僚だった歴史家小和田哲男教授との繋がりを書かれ、残っている。「若いとき、地味に研究にいそしんで、その成果です。いまは、第一人者とメディアで活躍されています。」長い人生で出会った著名人へ敬意をもって、語られた。よい評価を示された。

- ・過労死に追い込まれたる人あれど責任とらず生きる世とは
- ・青春は故郷に似て遠くあり差別・破壊と未来は暗き

若者にとって現代社会が豊かでないとその未来を悲しんで詠まれていると思われる作品である。作者自身を若者の立場に置いて心情を詠まれたことが過去にもあったので、このように読み解いた。

## 2. 「ベッドのなかより」—Tさんへ—についての感想

はじめに謝らねばいけないと思うのは、サブタイトルの「Tさんへ」を送られている短歌であるのに横入りして、私が感想を書く失礼さである。悲しみの時間を思い余って編集者に書かせてくださいと宣言した。言い訳のようであるが、厚かましさをお許しいただきたい。私の送りつけた短歌をお読みいただき、感想をどんなときも必ず、返信に書いて貰った。今は、感謝の気持ちが横溢しており、平常心を失っている。ところで、「市民科学通信」の9月号に篠原先生の「ベッドのなかより」病床連作が掲載され、私はすべての短歌に感想を書いて送った。10月12日に篠原先生から返信があった。「短歌についてはコメントまで頂き感謝します。」と書かれていた。ひきつづき「斎藤茂吉の晩年の歌集に出てくる最上川を意識して読んだものです。」と述べられていた。病床で最上川をイメージして詠まれたようで、ここでは、取り上げていない。若き日に斎藤茂吉の歌集に学ばれたことを知った。

### (1) 闘病における苦痛と覚悟

- ・下腹部の圧迫感の強まれば読書も叶わず息切れはげし

八月六日日付でいただいた書簡に、「通信」最後の原稿です」と書かれ、「ケーリッヒ・ケストナー著『動物会議』を思い返す」のコピーが同封されていた。文末に上記の「下腹部に」の短歌が載せられていた。8月5日記とあった。手紙の「もうねたきり、いつまで生きられるかです」とマジックペンで粗く書かれていた。身体の苦痛に絶叫されておるような表現である。もう手紙を出すのは、辞めるべきだと覚悟した。

お礼の返信だけはと再度、書いたのか記憶がない。九月六日日付の先生からの返信が残っている。この手紙に次の短歌がしたためられていた。

- ・ 耳元へ口を近づけ呼びかける医師のことばの胸にぞ届く

この作品も心に沁みる表現でお上手である。下句の「胸にぞ届く」が行き届いた結句になっている。「響く」というような概念表現で終わらせないで気持ちを寿分述べておられる。このときの手紙は文字も8月6日のように喘ぎあえぎ書かれたようには、感じられなかった。医療体制への感謝の歌の幾つかは先生の柔らかな心の動きが読み取れる。

## (2) 病床にあっても他者への気遣い

- ・ 布団よりベッドに代れば痛み減る光のような支援センター
- ・ 寄り添いて寡黙なれどもまめまめしケアメネージャーメモ握りつつ
- ・ ありがとう何十回言うだろうパートナーまた看護婦さんへ
- ・ 「近く寄り大きな声で」先輩が実習生を励ます声は

<改訂版に追加された一首>

- ・ あたたかき看護婦さんの言葉こそクスリ以上にエスポワール（希望）

私は結句に工夫されているのに注目した。「光のような支援センター」、「クスリ以上にエスポワール」というように明るい表現である。反面、救いを求められているようにも感じられた。闘病を脱して、元気になりたいと願う心理が読める。当然であろう。

## (3) ベッドのなかでイメージされた抒情

- ・ 鮮やかに茜重ねる雲の色黒み広がり闇と消えゆく

病棟の窓から見える夕ぐれから夜への移ろいを詠まれている。先生のお得意な詩情の漂う表象である。

- ・ 極楽か地獄へゆくか曼珠沙華ことしは四面とところ狭しと

お元気な頃、近隣の山をハイキングされていて、曼珠沙華を毎年見られことだろう。下句の「ことしは四面」というリアルな表現に、病室に閉じ込められても外界を空想しているよという心の叫びと死が近いという恐れが交差する。

- ・ あの山へ半年前はゆけたのに逢魔が時のいまや見るのみ

下句の「逢魔が時」は、漠然とした死の迫りくる予感と、歌い始めの「あの山」のユートピア的なたたずまいの対比が明確である。半年前に昇ったという手に届きそうな願望がもはや、遠のいている。複雑な心境が詠まれている。

- ・朝顔の蔓鉄柵に届くも行く先みえず風に漂う

確か入院前のお手紙に書かれていた作品だと記憶しているが朝顔の姿をご自身に見立てて描写しておられたのではないか。「風に漂う」が印象的である。

#### (4) 病床での読書の楽しみや思考など

「市民通信」10月号に書かれた改定版の導入文には、このように述べられている。

「「ベッドのなかより」外の社会をみるのにもようやく慣れてきました。しかし、病苦も全身に及ぶにいたってあらためて生と死というテーマに対して、絶えず頭のなかでストレートに向かわざるをえません。いいテーマでもあります。」なんという静かな自己洞察であろうか。連作中の読書や阿木津英さんとの書簡交流を詠まれた短歌には、喜びがあらわれている。

- ・日もすがるベッドのなかの暮らしにも良書と合えばこころ昂まる

—米原万里さん著書を読む—

- ・不謹慎なタイトルなれど実りあり『不実な美女か貞淑な醜女か』
- ・肩書にアソシエーションリストと書きこめば然りと寄こす阿木津英

病床にあっても女性の力に励まされておられる先生の安らぎのような心境が見えるようである。

#### (5) 病苦を自虐的に詠まれた歌

- ・立つことも座ることもままならぬ横臥しかなき四十キロは
- ・食べることでできなくなれば叶わざるわが身ながらも骨革筋衛門
- ・疼痛と圧迫感に巻き込まれ居場所もなくばうたが湧きくる

文字を打ち込むさえも切なくなる病魔との闘いが詠まれているが救いは、「うたが湧きくる」先生独自の創造意欲である。

むろん、ユーモアを交える態度で詠んでおられる。それでも哀しい。

#### (6) 病床を訪れる家族を詠んだ歌

- ・折々に訪ねてくれる子どもらのサポートありてしばし賑わう
- ・エンディングノート書き終えせいせいす葬式いらぬあとは仲よく

辞世の短歌の自覚があたりだったかどうか今は推察もかなわない。「葬式いらぬあとはなかよく」とは、悲壮感を感じさせない。父親らしい思いやり。先生の磊落な鷹揚さが伺えて、微笑ましい。納得がゆくのである。

#### (7) 病床の外、世界を詠まれた社会詠

- ・激動の世界史上をしゅくしゅくと国葬もなくゴルバチョフゆく
- ・核兵器つかえば愚か気づくらんカントの語る「自然の狡猾」
- ・ミサイルに倒壊したる病院の廊下の奥か死者の足みゆ

「ゴルバチョフ」を追悼する歌は、九月六日のお手紙に、自筆で書かれていた。

「病院の廊下の奥から死者の足みゆ」は、「市民科学通信」9月号でも連作の最初に掲載されていた作品である。ウクライナ侵攻の戦場が詠まれているのだと思う。

「核兵器つかえば」の歌は、「改訂版」から登場したので、ロシアの戦略を西側諸国が恐れ、見守る状況を見据えて詠まれたものと理解される。冒頭の文章に、「外の社会をみるのにもようやく慣れてきました。」と書かれているが、テレビなどは視聴されておられたのだろうか。短歌としては、「ミサイルに転倒したる」の作品は、お上手であるが、「ゴルバチョフ追悼」の歌には、しみじみとした情感が感じられる。安倍元首相の国葬論議に揺れていた時期である。静かなゴルバチョフの葬儀は、西側から見れば偉大な業績を上げた功労者であるのに矛盾しているという思いがする。

NHKでは、「ゴルバチョフ・インタビュー番組」を再放送した。ウクライナ侵攻を批判したプーチンとの意見交換では、物別れになった経験を語っていた。プーチンが国民に新年の挨拶をテレビで述べているとき、それをゴルバチョフが民家の食卓で見ている映像が歴史を映し出していた。篠原先生の社会詠は、一級品だと思われる。「しゅくしゅくと国葬もなく」が簡潔であるが心打つ。

### 3. 見事に死との向かい合い短歌を残された

手元に「ベッドのなかより」の連作に記述されていない短歌が二首残っている。

7月16日付の手紙の終わりに記入されたものである。ウクライナ侵攻に対する思いが歌われている。

- ・争いと戦争堪えぬこの世界変わるしかない変えるしかなき
- ・支えをば失い宙に浮く蔓の明日はどうなる朝顔の朝

ロシアのウクライナ侵攻の終結を見ることなく身罷られたが、終生、平和を願う心を持ち続けられた。「変えるしかなき」という強い叫びを言葉にしておられた。

「支えを失い」は、朝顔の蔓を見て即詠と思われる。朝顔を詠みながら現代社会の寄る辺ない不安を象徴させておられる。

入院される以前の手紙なので、切羽詰まった身体的苦痛状態の時の作品ではない。

戦争経験者で同時代の半藤一利氏についても詳細に篠原先生は、書いておられる。昨年、5月19日の手紙である。「過日亡くなった半藤一利、90歳でしたが、学生時代、近所に住んでいて、地域で読書会をもっていました。それぞれ大学は違っていたのですが何人かで加藤周一さんの書いたもの、また、彼の翻訳するフランスのレジスタンス文学を読みあったものです。その彼も逝ってしまい、止む得ないこととはいえ、年をとると、寂しいものですね。」読書会に、加藤周一氏が参加されていたとは、凄いなという感想を持ったのに、返事を書く際に、なぜ掘り下げて質問しなかったか。今更だが、惜しまれる。先生の青春時代の体験は宝の山であるのを気づきながら遠慮していた。返すがえすも残念なことである。

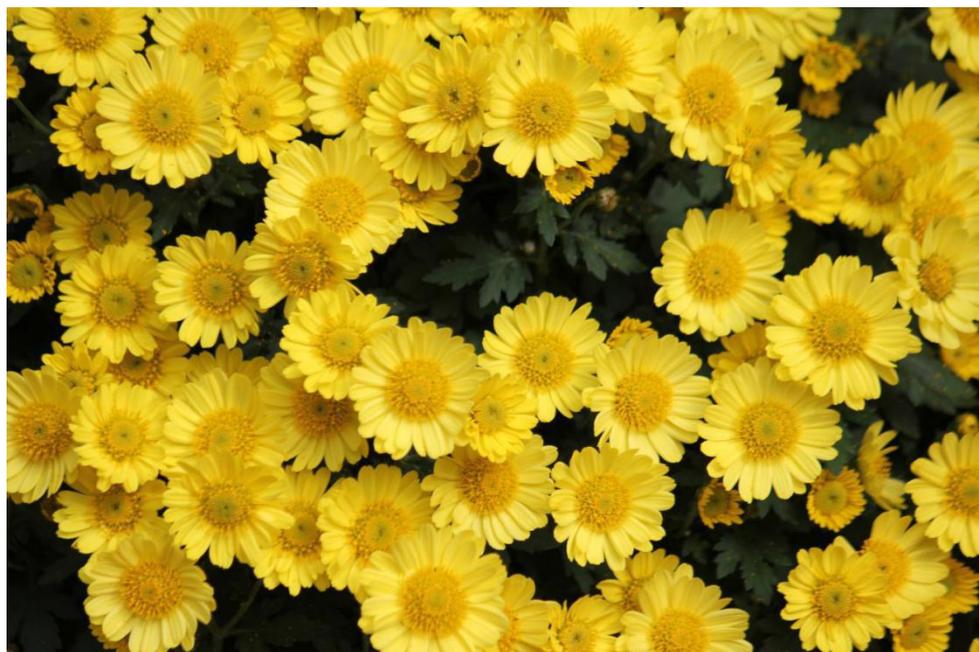
まとめに変えて、ここまで書いたことを振り返らせてもらう。

禅宗の高僧であっても死に直面すればうろたえると、よく言われる。人生の最期に自己を冷静

に客体化した短歌を詠まれたことは、どれほど偉い僧侶にも勝る静謐さである。生死を考え抜いて冷静でいられた精神の強靱さに驚くばかりである。一度、覚悟を決められた8月6日の時点から、「市民科学通信」9月号で「ベッドのなかより」で、阿木津英さんと手紙のやりとりをされていることを知り、ふたたび手紙を差し上げて、一度、元気を取り戻されたことを知った。その後、10月12日以降、書簡交換はなくなった。先生にご負担をおかけしてはいけないと、私の方が待機していた次第であった。

人生の最期に、非の打ちどころのない短歌連作を詠まれた実力は、他に真似のできない功績である。闘病といえども精神を奮い立たせられ、真剣勝負だったと推察する。「知の巨人」と言わせてもらいたい思考力、洞察力を持ち、豊かな包容力で後輩を引っ張ってくださった篠原先生のご指導にただただ感謝申し上げる次第である。どうか安らかに眠りくださいとご冥福を祈るのみである。合掌

(まじま まさおみ)



# 篠原三郎と柄谷行人（1）

## —史的唯物論への疑問と未来への展望—

宮崎 昭

がん組織が片眼を奪い、そして体のあちこちに転移して、歩行もままならないなか、それでもなお、ベッドに横たわりながら柄谷行人の『力と交換様式』を瞬く間に読み上げ、それだけでなく、というか、それがとてつもなく困難なことであったのに、さらにこの「市民科学通信」10月号、11月号に原稿を寄せるという尋常ならざる「超人」ぶりを見せてくれました。

しかし、ただ驚いているだけでは、篠原先生の偉功に応えることにはなりません。謹んで哀悼の意を表明するとともに、残された私たち「NGO 市民科学京都研究所」の面々が受け止め、継承すべきものは何なのか、わたしなりの考えを少しくまとめることで、ご恩に報いたいと思うのです。

### （一）

ここ数年、篠原先生の柄谷行人への傾注、関与は尋常ならざるものがありました。思い入れの強烈さです。それは長年指導を受けてきた者にとっても、特別なことのように感じられました。指導教授であった高島善哉さんや僚友の高須賀義博さんを語る口調とは大違いでした。率直に言って、“どうしてなんだろう”という素朴な疑問が当初からすでにあったのです。

ところが、この疑問は、わたしたちの研究所が主催する、柄谷理論を勉強するプロジェクトの議論のなかで次第に解き明かされたように思います。皆、いえ、私だけだったと思いますが、頭の中に蜘蛛の巣が張っているかのような、いわば未知の航海に出た、迷走の研究会でした。そんな中で、ツボを得た先生の一言、二言が思い出されます。

単純に言えば、そしてわたしの“勘ぐり”なのですが、先生の心意は“わが意を得たり”ではなかったか、“わたしの考えを真に理解する研究者がいるのだ”、“いわば「メンター」のような存在に出会ったのだ”、ということではなかったか、と思うのです。篠原先生ご自身も、社会科学だけでなく文化芸術にわたる業績があり、いまなお大きな影響力をもっているのですが、その先生が柄谷さんへの賛辞を「ノーベル賞級だ」と言わしめたほど、“ぞっこん”だったのです。そう思った理由について、簡単にまとめてみたいと思います。二点あります。まず第一点、研究者たるものの「姿勢」の問題です。これは、これまで繰り返し、繰り返し、私が院生だった時から40年以上指摘されてきたことです。

### （二）

学生時代の思い出です。

環境問題がテーマでした。その時、篠原先生はある著名な社会科学者の言葉を紹介しながら、優しい語り口でこう述べました。

「環境汚染を批判する者が、煙草を吸いながらあれこれ言うのは如何なものか。言ってることとやってることが矛盾していないか。そのことを自分のなかでどのように処理しているのか…」。

目の前の先生は、私の方に顔を向けていなかったのですが、“心当たり”のある私はもちろん背筋が凍るような震えを感じました。たぶん、「そんなこと言っても…」と、わたしはニヤニヤするばかりだったように記憶しています。ここで、できることならもう一度、お説教を受けたいと思います。いまとなつては、論文を辿るしかありません。

…科学とは、いったい、なんなのか、批判はいかにあるべきか、…  
迂遠なことではあるが、まずは、研究方法論上の一般的なことよりはじめていきたい。

わたくしたちが研究をすすめていくにあたっては、一定の課題なり、その意識をもって対象に迫っているはずである。そして一定の方法をもちいて対象を分析、課題にたいする解答を探している。しかし、課題意識は、個人によっても異なるし、時間的にも変わっていくであろう。その課題解決のための方法も、もちろん、人によって違うであろう。実証を主とするものも、理論を主とするものも、また、その内部でも、いろいろあるだろう（篠原[1994]240-241頁）。

「迂遠」なことかもしれないが、しかし基本に立ち帰ることの重要性を、「一般的」なことだと断って説かれています。わたしも、日々、肝に銘じているところですが、なかなかどうして、いつの間にか霧消してしまうのが常でした。そこで、各人の、「課題意識」の何たるかが説明されます。

### (三)

研究者はそれぞれが「異なり」「違って」いて、それでよろしい、と言っているわけでは、もちろんありません。ここへきて、「思想」の問題が基本に置かれます。つまり、科学にとって「思想」は本質的に不可欠なモメントであるということです。

このまま、この筋で、「思想」について論じたいのですが、急に思い出したことがあります。それほど前の話ではないのですが、篠原先生が嘆いていた案件です。

「最近の大学生が職業を選択する際、大学教員が上位にランクされているという話にビックリした」。給料が高くて、休みが多く自由時間が長くて、世間からの評価も高い、というのが選択理由です。“大学教授になる方法”とか“論文の書き方”などがネット上にも跋扈しているわけですから、無理もないのかと溜息をつきます。“悪いこと”とは言い切りませんが、何か大事な事柄が欠落しているように思います。

またまた思い出しました。ウエーバーの『職業としての学問』を薦められ、また「精神なき専門人」「心情なき享楽人」という言葉を知ったのも、そのころでした。

さて、その「筋」の話に戻ります。

…研究者がその仕事にあたって、いかなる方法を選ぶか、創造するかは、研究者の対象にたいする見方、つまり、対象観、ないし、かれの思想にかかわっているのではないかと思われるのである。そのかぎりでは、かれの方法というのは、かれの思想のあり方を表現しているものでもあるといえよう（同上 241 頁）。

研究者は、その多くが「いかなる方法を選ぶか、創造するか」について苦闘しています。その悶え苦しむような思考の、その行く末を振り返るとき、そこに「思想」というものが姿を現します。ある時、高群逸枝の『火の国の女の日記』を紹介されたのも、そんな意図があったからだ、今だから推測します。そうであるからこそ、次のような厳しい指摘が続きます。

…研究者の思想は、かれの課題の解決の方向をも示唆していると考えられる。ということは、科学的認識の質の差は、またその深淺広狭は、究極的には、研究者のもっている思想のそれらと関係があるようにみえる。いいかえれば、かれの思想が課題、対象、方法という科学の構図を規定し、限定しているということである（同上 241 頁）。

「思想」が「科学の構図」を規定する、と言い切っています。そこで生まれる「深淺広狭」の違いは、それぞれが有する「思想」に根ざしているわけですから、自己への厳しい問いかけ、反省が求められます。

(四)

柄谷さんは、篠原先生の「メンター」であるだけに（あくまでもわたしの思いですが）、この点については特に厳しい姿勢をもっていると思われるのです。たとえば、社会主義に関する柄谷さんの次のような指摘に、その「思想」の「深淺広狭」を読み取ったのではないか。ここに、社会主義にたいする科学的志向と楽観的な展望を語る、柄谷行人があります。

ところで、近年になって、私が興味をもつようになったのは、「社会主義の科学」を唱えたエンゲルスのほうである。これまで私は、彼をもっぱら「史的唯物論」の創始者として見てきた。「社会主義の科学」といっても、結局、史的唯物論の言い換えにすぎないように見える。しかし、必ずしもそうではない、ということに気づいたのである。本書を書き始めたきっかけは、むしろそこにある（柄谷 [2022] 33 頁）。

ここには、柄谷さんの苦渋に満ちた思考の跡が読み取れます。批判されてしかるべき「史的唯物論」であったはずなのに、そうではなくて、むしろ「史的唯物論」を科学として再構築しようとする姿勢が読み取れます。それが「思想」というものだ、と篠原先生は得心したのではないのでしょうか。実際、先生は、柄谷さんがエンゲルスの再評価をしたことに、ここから賛同の意志を表明していました。マルクスに並ぶエンゲルスが、このところ所在なげな評価を得ていた今だからこそ、エンゲルスへの照射は、何ものにも代えがたい「思想」上のバック・アップだったに違いありません。

かつて、柄谷さんは次のように述べていました。長くなりますが、そして難解な文章であることを事前にお断りして紹介します。

彼は（エンゲルスのこと—宮崎）ヘーゲルの哲学体系に合わせて、マルクス主義の体系を構成した。弁証法的唯物論（論理学）、自然弁証法（自然哲学）、史的唯物論（歴史哲学）、経済学と国家論（法哲学）など。以後、マルクス主義者はそれを文学・芸術論（美学）をふくめて完成しようとしてきた。だが、それらは根本的に疑わしいのだ。マルクスが一度も思想を体系化しようとしなかったのは、時間がなかったからではない。それを拒絶していたからである。われわれは、経済学とか哲学とか政治学とかいった分類をとりあえず括弧に入れなければならない。何を対象とするにしても、マルクスがとった態度を見るべきなのだ。明白なことは、マルクスの「思想」は、それ以前のものに対する「批判」としてしか存在していないということである。…批判は、たんに相手を否定することではない（柄谷[2010]198 頁）。

マルクスから学んだ柄谷さんは、「思想」の体系化に大きな疑問をもち、「思想」とは「それ以前のものに対する『批判』としてしか存在しない」という見解に達します。『資本論』の副題が「経済学批判」であったように、「批判」は実に創造的営みであったのです。これは、篠原先生の基本的立場でした。「職業」として大学の教壇にたつて、その科目が「経営学」であったとしても、「現代管理社会」批判という立ち位置でした。

(五)

かつて、こんな短歌を、世に贈りだしています。

日本的管理称える論きけど一言もなき自由という語（篠原[1994]201 頁）

言うまでもないことですが、「管理社会」とか「経営管理」ということを、ただ“学説上”の問題あるいは実利的な課題として受け止めているわけではないのです。「自由」への希求がベースになって、研究する者にとっての“向き合う姿勢”、「思想」の重要性が、この短歌に込められています。こう書いているうちに、また思い出したことがあります。度々で恐縮です。

「過労死」が「カロウシ」になり、さらには「Karosi」になって世界中の話題になったころ、川人博『過労自殺』を紹介しながら、経営学のあり方を諄々と説いていた姿を思い出します。その著では、次のように述べられていました。

多くの前途ある青年が過労自殺、過労死で亡くなっている事実を見るにつけ、私は、企業を疑い、十分な警戒心をもって入社していくことの大切さを痛感する（川人 [1998]194 頁）。

その上で、社会科学の「ていたらく」といってよいかどうか、川人さんは、怒りを滲ませながら、こう言っていました。

日本の学校教育では、こうした企業の実態を正確に学生に伝えることが、大変弱い。大学の法学部、経済学部、商学部では、法律知識や経済知識を教えても、企業内部のどろどろとした実態をほとんど教えていない。中学・高校段階でも、企業の負の部分に関してあまり触れない。過労自殺が発生している企業には、学生の就職人気ランキングの上位常連のところが多いのだが、その内実がほとんど学生には知られていないのが実情である」（同上、196 頁）。

そうなんです、“なぜ経営学者はこの問題を取り上げないのか”という趣旨の指摘を、篠原先生が熱心に問題提起していたことを思い出します。生きる自由を失った人たちへの“挽歌”であるとともに、こうした事態を招いた社会的な根因を、科学的に分析する「思想」の断固たる存在理由を私たち学生に問うていたのです。いま、目の前にある過労死（生きることの自由の否定）という惨状に対する「批判」が、「思想」の表現そのものなのです。ところで、篠原先生の語り口に熱がおびたのは、川人さんが「法学部、経済学部、商学部」と言って、わが「経営学部」を無視していることに理由があったのかもしれませんが、邪推ですが。

ともかく、篠原先生は柄谷さんを全身全霊、「思想」の人であると考えていたのではないでしょう。時に行き詰まり、頭が狂いそうになった時にも、自説の修正や改変を試みる柄谷さんの姿勢に対して、そこにこそ思想の拠って来る、学問や科学に対する畏敬の姿勢を感じ取ったのだと思うのです。

だから、篠原三郎と柄谷行人の、時空を超えたアンサンブルを想念してみたいのです。柄谷さんが「エンゲルス再考」と題したなかの一節に、篠原先生は大注目したはずです。

私はここまで、1848年革命の挫折のあと、マルクスが「経済学批判」に向かったこと、そのとき、貨幣や資本を交換から生じる“物神”として見る観点を得たことを重視してきた。一方、エンゲルスに関しては、マルクスに先立って「史的唯物論」、つまり、歴史を生産様式から見る観点を確立し、のちに『ユートピアから科学へ』で、科学的社会主義を唱えた人物として見ただけであった。私は、これまでの著作においてもエンゲルスをそのように見てきた。しかし、『世界史の構造』を出版した後、そのような見方では不十分だと考えるようになったのである（柄谷 [2022] 355 頁）。

「持説」を曲げない柄谷行人ではありませんでした。それは、マルクスやエンゲルスの一言一句に拘泥して、そこにベースをおく思考方法をとっていないからです。誤解を恐れずにいえば、マルクスやエンゲルスの「思想」（批判という思考）を共有しようとするスタンスが第一の基本におかれているからだと思います。今にして思えば、「マルクスその可能性の中心」という表現のなかに、それが現れています。あるいはまた、「超越論的」批判という姿勢にもです（柄谷 [2010] 140-141 頁）。

さて、篠原先生が、この時脳裏に浮かべたのは、自身による、「管理の二重性」や「使用価値の社会性」をめぐる一連の「史的唯物論」批判であり、マルクス『資本論』への疑問の提示であったはずですが。いまなお、新鮮な問題提起だと思います。字数の関係もあり、ここでは、その糸口である「管理の二重性」論の通説の根拠となった、マルクスの有名な言質を紹介することで終りそうです。こんな言い方は適切ではないと思いますが、永らく篠原先生を悩ませ続けたところ

(六)

さて、柄谷さんに敬意を払う、第一点の「姿勢」、「思想」の問題につづく、第二の理由、マルクス『資本論』への率直な疑問の表明、それに対する賛意です。

いわゆる管理の二重性論は、普通、『資本論』におけるつぎの叙述に依拠している。資本主義的管理の本質を的確に捉えている箇所としてよく知られているところである。

「監督や指揮の労働は、直接的生産過程が社会的に結合された過程の姿をとって独立生産者の孤立した労働としては現れない場合には、どこでも必ず発生する。しかし、この労働は二重の性質のものである。

一面では、すべての多数の個人が協業する労働では、必然的に過程の関連と統一とは一つの指揮する意志に表わされ、また、ちょうどオーケストラの指揮者の場合のように、部分労働にではなく作業場の総活動に関する機能にも表わされる。これは、どんな結合的生産様式でも行われなければならない生産的労働である。

他面では——商業的部門はまったく別として——このような監督労働は、直接生産者としての労働者と生産手段の所有者との対立にもとづくすべての生産様式のもとで、必然的に発生する。この対立が大きければ大きいほど、それだけこの監督労働が演ずる役割は大きい。…（略—宮崎）…それは、ちょうど、専制国家では政府が行なう監督や全面干渉の労働が二つのものを、すなわちすべての共同体の性質から生ずる共同事務の実行と、民衆にたいする政府の対立から生ずる独自の機能との両方を包括しているようなものである」（篠原[1994]205-206 頁）。

（次回、篠原先生が、このマルクスの命題にたいして、いかなる“論戦”に挑んだのか、追認していくことにします。とてもチャーミングな問いかけです。）

（みやざき あきら）

【参考資料】

柄谷行人【2010】『トランスクリティーク』岩波現代文庫

柄谷行人【2022】『力と交換様式』岩波書店

川人 博【1998】『過労自殺』岩波新書

篠原三郎【1994】『現代管理社会論の展望—現代をみる眼—物象化を超えて』こうち書房

高群逸枝【1974】『火の国の女の日記』講談社文庫

# ぶらり、「霊」の旅

## —柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—

香椎五郎

待望の新著、柄谷行人『力と交換様式』を読んで、改めて「霊」の力というものが、とてつもなく大きな存在であることを強く感じました。

すでに、この間、

- (i) 「講演：柄谷行人 交換様式と『マルクスその可能性の中心』」（『文學界』2019年12月号）
- (ii) 「『近代文学の終わり』再考 文学という妖怪」（『文學界』2020年3月号、\*2019年12月1日「長池講義」の講演草稿）
- (iii) 「霊と反復」（『群像』2021年10月号）
- (iv) 「講演：柄谷行人「『力と交換様式』をめぐって」聞き手・國分功一郎/コメンテーター・斎藤幸平（『文學界』2022年10月号）、

が発表されて、「霊」に込めた思いと論点が提示されていました。『世界史の構造』が発表されて10年余り、まったく空白ではなかったのです。いわば、上記4本の論文（講演）は、予告編（予行演習）であったのかもしれませんが。今回、余程のエネルギーを消尽したのか、柄谷さんは、インタビューに応じて、次のように語っています。

私は、これ以上ないというところまで書きました。だから、今後どうすればいいんですか、なんてことを聞かないでもらいたい（笑）（柄谷[2022B]）。

一番説明するのが難しい『D』について書いているうちに、A、B、Cについてももう一度考える必要を感じたのです（同上）。

考えるということは、再考するということですよ（笑）。そうすると、同じ問題が違って見えてくる（同上）。

その結果、この作品が出来上がりました。

### §

「霊」について、真面目に考えるようになったのは、柄谷さんの「交換様式」論を学ぶようになってからです。一般に、「霊」ということを科学的に検討し、研究しようとする人は少ないと思います。わたしも、そうでした。いまでも、疑心暗鬼なところがあることを正直に告白します。しかし、柄谷さんの次の言葉は重いと考えます。

確かに、そのような力を霊的な力として説明するのは、科学的とは思われない。が、霊のように見える力が存在するという事実を否認することも、非科学的である。それは、それ以上の探求を閉ざしてしまうからだ。要するに、マルクスが「物神」の力に

言及することで開いた認識の可能性が、霊といえば嘲笑する、“科学的”な頭をもった人たちによって閉ざされてしまったのだ（柄谷[2022A]47頁）。

仮にですが、もし「霊」という言葉を使わず、“X”であるとか、“?”でもよかったのです。用語（記号）の当否も大事ですが、それ以上に“その”存在の認否が問われているのです。

そこで、“ネット・サーフィン”ならぬ、論文サーフィンを行なって、「霊」という「存在」について、マルクス『資本論』と柄谷『力と交換様式』での用例を辿ってみます。わたしは、すでに「『霊』にとり憑かれた商品たち—物神性と物象化の相補関係—」を発表して、この「非科学的」な話と思われる問題の解明に挑戦しました。その冒頭で、次のように述べています。

「力」とは何か、つくづく考えてしまうのが、物理的な、あるいは化学的なそれではなく、いま考え悩むのは社会のなかでの「力」であり、人と人とを結び付け、あるいは排除する「力」のことです。この稿では、商品交換を推し進める「力」について考えます。その「力」とは何なのでしょう（香椎[2022]3頁）。

この問題に、文字通り、応えてくれたのが、今回の『力と交換様式』だと思うのですが、ここでは貨幣の物神性（交換様式Cの話）にとどまらず、交換様式AやBについても論究され、さらには交換様式Dにいたるまでの展開になっており、私たちが読み解く姿勢にかなりの緊張感を与えていると言ってよいかもしれません。

## §

まず、「霊」という表現の出所を整理します。マルクス『資本論』ですから、商品の「物神性」についての言及です。ここに紹介するのは、「NGO 市民科学京都研究所」で行なわれた『力と交換様式』の「合評会」（2022年11月6日）において、発表したレジュメの一部です。今回、少し手をいれましたが、ほぼそのままです。

☞以下、レジュメ

物神性を語った『資本論』では、どのような使われ方をしていただろうか？柄谷さんが指摘するように、「霊」の存在が“冗談”と受け止められた理由を考えてみる。第1篇第1章第4節「商品の呪物的性格とその秘密」第2章「交換過程」からのピックアップである（ゴチと下線は香椎）。

- ①「神学的なむら気に満ちたもの…」（96頁）
- ②「机が自分かってに踊りだすときよりもはるかに奇怪な妄想を…」（同上）
- ③「商品の神秘的な性格は…」（同上）
- ④「その謎のような性格…」（97頁）
- ⑤「感覚的であると同時に超感覚的であるもの…」（98頁）
- ⑥「われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければ…」（同上）
- ⑦「彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行うのである」（100頁）
- ⑧「物的外皮の下に隠された関係…」（注27、100頁）
- ⑨「労働生産物を霧のなかに包みこむ一切の奇怪事は、…」（102頁）
- ⑩「現実の世界の宗教的な反射は…社会的な生活過程の…それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである」（106頁）

⇒ロビンソン物語と「史的唯物論」の残滓がある

- ⑪「商品世界に付着している呪物崇拝…」（110頁）
- ⑫「彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権力とを獣に与える。この

刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである」（第2章「交換過程」、「ヨハネの黙示録」からの引用、116頁）。ここで「獣」とは、一般的等価物である貨幣のこと。ホブス「リヴァイアサン」を想起。

このあたり、マルクスは「物神性」に関する画期的な発見をする一方、⑩のような史的唯物論に導かれた「未来像」も語っており、そういう理解が基本におかれて、「神秘的」で「奇怪」な「夢幻境」の論述は“錯覚”論として見られるか、あるいは「冗談」として理解されてきたのではないか。

☞以上

マルクスは「霊」という表現をしていません。しかし、「神秘的」とか「超感覚的」などの表現のなかには、「霊」という言葉しか思い浮かばないのも事実です。では、柄谷さんは、そのうえで、どのように使っているのでしょうか。再び、「合評会」でのレジュメを紹介します。

## §

☞以下レジュメ

では、「霊」というもの、そして「霊」の力というものを、どのように考えているのだろうか。柄谷『力と交換様式』のなかから拾っていくことにする（ゴチと下線は香椎）。

<セクション1>

1. 人々を自発的に従うようにさせる「力」（8頁）
2. 経済的と見なされる事態の根源に、いわば霊的な力が働いている（15-16頁）
3. …「人間の頭脳の産物」であるにもかかわらず、「固有の生命」をもち人間を強いる「力」が存在するという事実（21頁）
4. 交換：人々のたんなる同意や約束ではない。「強制的」な“力”を必要とする（22頁）
5. 「神の力」としてあらわれる（35頁）
6. 何か人を強制するような観念（46頁）
7. 見知らぬ者との交換においては、それを可能にする「力」が不可欠（46頁）
8. 海の怪獣、つまり、物理的に存在しない霊的な存在（48頁）
9. このような怪獣が物理的に作られたものではなく、人間と人間の「契約」によって形成されるということ…それは「恐怖に強要された契約」である（101頁）
10. 交換様式Aに伴う霊的な力をさらに上回るような霊的な力である。それは交換様式Bによってもたらされる（116頁）
11. カリスマとは、いうまでもなく、霊的な力である（118頁）
12. 遠隔的な力（49頁、119頁）
13. たとえ、霊的な存在であろうと、現にそこに一種の「力」が働くことを認めた者が近代科学をもたらしたのだ（51頁）
14. スミスの「見えざる手」…エゴイズムの超克…市場のメカニズム…それを解明することが、科学としての経済学である（56頁）
15. “見えざる手”とは、実は貨幣であり、貨幣の働きである（59頁）
16. 交換はまず、互酬交換（A）として始まった…モース…「贈与せよ」「贈与を受け取れ」「贈与にお返しせよ」という強制、しかも霊による強制をとまなう。つまり、交換には、何らかの観念的な力が不可欠なのだ（64-65頁）
17. マオリ族の中では、…贈与された物に付いたハウは、元の場所に戻りたがる（72頁）
18. 宗教が交換関係に根ざすことは確かである（85頁）

19. 遊動バンドが定住したあと…彼らは未曾有の危機に出会った…攻撃欲動として奔出した…それを抑えて他者への譲渡＝贈与を迫る「反復強迫」があらわれた。そして、それは「霊」の命令として出現 (94 頁)
20. 首長制社会は…交換様式 A、そしてそこから生じる力によって支えられている。この「力」は、定住化によって抑えられた原遊動性 (U) の強迫的な回帰にもとづくものだ (123 頁)
21. 「忘却されたもの」(フロイトー宮崎)とは、殺された原父ではなくて、原遊動性 (U)である。…それは贈与交換を命じる霊としてあらわれた (96 頁)
22. C は B が始まるのと同じ時期に始まった (131 頁)
23. 信用とは、いわば、両者を拘束するような「力」である (132 頁)
24. そもそもどんな交換も、信用なくしてありえない。そして信用を形成するのは贈与である。その意味で、財物の交換は根本的に、贈与交換によって支えられている (133 頁)
25. クラとは、それまでの共同体を越える盟約共同体である (134 頁)
26. 沈黙交易…交易を可能にするような場…神聖な場所が選ばれた。それが「市場」(market) …それは本来、霊的な場である (134 頁)

### <セクション 2>

1. 神觀念の変化をもたらすのは、支配的な交換様式の変容である…呪術から普遍宗教にいたる変容 (152 頁)
2. 世界宗教が交換様式 B と C の圧倒的優越によってもたらされる…普遍宗教はそれらに対抗するものとして、交換様式 D によってもたらされる。そして、D とは、B と C によって封じ込められた A の「高次元での回復」にほかならない (158 頁)
3. アジール (asylum) と呼ばれる聖域…呪術的であると同時に、倫理的な意義、つまり反国家的な動機をはらむ (160 頁)
4. 遊牧民は原遊動民とは異なるが、後者にあった重要な側面、…自由独立性と平等性を保持した…遊牧民は「原遊動性」の記憶を保持した… (161 頁)
5. イスラエルの預言者…そのとき D が出現した…D は彼らの意志に反してあらわれた。D は自己から発するのではなく、強迫的に到来するがゆえに、見通すことも理解することもできない (174 頁)
6. イエス…彼にとって、隣人とは、社会的諸関係を越えて見出されるような他者である。…交換様式 A・B・C を越えて人と交わること…それが D の到来であり、「神の国」の到来である (177-178 頁)
7. ソクラテス…「イソノミア」(無支配)…ダイモン (霊)のお告げに従ってそうした…そのあげく処刑された…「神の委託を引き受けた」倫理的預言者であった… (180 頁)
8. D の出現は、一度だけでなく、幾度もくりかえされる…普遍宗教の始祖に帰れというかたちをとる。…千年王国やさまざまな異端の運動がそうである (187 頁)
9. エデンの園への回帰は、あの世においてではなく、この世における A・B・C からの脱却なのだ。そして D は人間の願望や意志によってもたらされるものではなく、それらを越えた何かとして到来する (208-209 頁)

### <セクション 3>

1. 『資本論』…商品の価値を、「商品の内在的精霊」あるいは「物神」、すなわち交換において生じる観念的な「力」として見出したのだ (262 頁)
2. …商品物神が貨幣物神に、転化して、世界を牛耳るにいたる過程を見ようとした。ゆえに、それらはむしろ宗教的な現象だというべきである (243 頁)

3. 1848年の革命…社会主義の敗北であると同時に、ある意味で、その実現でもあった。  
…ヨーロッパ各地で、資本＝ネーション＝国家が生じた…この時点で、マルクスは新たな認識を得た。というより、新たな「幽霊」を見出したのだ。…“資本主義という幽霊”を (266-267 頁)
  4. ヘーゲル「精神の現象学」、マルクス『資本論』「物神の現象学」…「ヘーゲルの弟子」と名乗った (27 頁)
  5. …物神という言葉が二度と使わなかった…しかし、事実上、…それを「信用」に見出した。…それはたんなる信頼ではなく、人を強いる観念的な力であり、その意味で物神的である (270 頁)
  6. …「信用」は、「物神」（商品の内在的精霊 holy ghost）の否定ではなくて、その変形にすぎない (271 頁)
  7. …信用主義の拡張とともに、人々は物神から解放されたわけではない。その逆である (271 頁)
  8. マルクスが「物神」と呼ぶものを最初に想定したのは、ブルードン…資本主義経済の根柢に「神」が存在… (272 頁)
  9. ホブズがとらえたのはいわば交換様式 Bにおける社会契約であり、マルクスがとらえたのは交換様式 Cにおける社会契約だ… (274 頁)
  10. …第一巻を出した時点で…資本物神を交換様式 C から見る視点を失っただけでなく、実は、国家を交換様式 B から見る可能性をも失ったのである…史的唯物論の見方に戻ってしまったのだ (282 頁)
  11. …後のマルクス主義者には伝わらなかった。しかし、その原因はむしろ、マルクス自身にある (303 頁)
  12. 第一巻の最後の辺りで、「資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る」…という言葉をつけ加えた。しかし、このことは、『資本論』にあった認識を棄てることに等しい (304 頁)
  13. カント…諸国家の連合（アソシエーション）は、人間がその意志によって作るようなものではないし、また、その意志によって斥けられるようなものではない。それを作る主体は「人間」ではない。といっても、「神」でもない。それは、人間であり、同時に、人間が意識しないような何かである。それをカントは「自然」と呼んだ (287 頁)
- ➡ 柄谷さんが「霊」の「力」というのは、このカントの「自然」観にある。
14. 自然の「隠微な計画」…自然の計画…神が作ったものではなく人間が作ったものだが、にもかかわらずそれが人間を超えた「力」として働くことを、示唆したのである。…カントは、私がいう「交換様式 (D)」のようなものを感知していた… (289 頁)
  15. 『永遠平和のために』…カントが考えたのは、国家、いいかえれば、交換様式 B がもたらした怪獣をいかにして揚棄するかという問題であった。そのとき、彼が示唆したのは、それを片づける「力」があるということだ。かれはそれを「神」と呼ばず、「自然」と呼んだ。…交換様式 D に該当するものを見出したといってもよい (290 頁)
  16. ネーション…国家が破壊されても残存する観念的な「力」としてある。その意味で、ネーションも一種の“霊”だといってよい (291 頁)
  17. ネーションは、A の“低次元での”回復である (292 頁)

☞以上

## §

たんなる文言の引用、羅列でしかなく、ぶらり、ぶらり、「霊」を追い求めただけの「旅」の報告でした。しかし、この“ぶらり旅”ではありますが、取り上げて紹介した一言一句を眺めただけでも、生産様式からではなく交換様式から世界史を見る論理の運びに、「霊」という強迫的

な力の存在が決定的な役割を果たしていることが伝わってきます。なお、わたしは「合評会」で、交換様式 D にかかわる踏み込んだ報告も行なっています。それは改めて次の機会に発表することになります。

特に注目しているのは、D について考えることに「一番つまずいた」「もう頭が働かない」、そして長年親しんできたお酒をやめたという、自身による告白です（柄谷[2022B]）。もう一度、最初から読み直してみます。

(かしい ごろう)

#### 【参考文献】

香椎五郎[2022] 「『霊』にとり憑かれた商品たち—物神性と物象化の相補関係—」 『市民の科学』 第 12 号、晃洋書房

柄谷行人[2022A] 『力と交換様式』 岩波書店

柄谷行人[2022B] 「柄谷行人『力と交換様式』インタビュー 絶望の先にある「希望」」 (じんぶん堂 (asahi.com))

マルクス[1968] 『資本論』 大月書店 (普及版)



# 負け犬の遠吠え

塩小路橋宅三

通学制大学においては対面授業に勝るものはないと主張していたが、学生の意見も聞かずに全国の大学が遠隔授業に舵を切ってしまった。この遠隔授業の決定が新型コロナ感染拡大を抑制したとの証拠はない。空気感染を完封するには一切の人間としての活動を止めるしかなかったのであるが、専制的で強権的な政治体制の国でないと不可能なことである。とりあえず音声入りパワーポイントによる電子紙芝居を拒否し、無観客授業の撮影に応じたが、学校側からするとパワーポイントを拒否していること事態が、職務命令違反と考えていたのかもしれない。しかしながら、このような遠隔授業も仕方がないと言いながら続けていると、得るものよりも失うことが多いように感じる。さらに、万全の措置を講じて対面式入学試験を行えるぐらいならば、対面授業も可能であったと思える。

数値を使用した実証的分析はいかにも学術的に見えるが、資本主義に内在している矛盾を否定しているようでも肯定している研究が見受けられる。株主主義に勝てるはずがないという結論である。特に若い研究者に多く見られるが、それは大学教員として採用する側の教員が「実学」などと主張して就職訓練を重視するからである。これは就職率向上のための訓練であって職業教育とは無縁のものである。その結果、経済的殺し合いを演じることとなり、過労死や過労自殺が社会問題化している。「人を殺めることなかれ」が定言命題ならば、経済的戦争だから人を殺すのも仕方がないというような教育があってはならない。ましてや、殺生の禁止が教義である慈悲深い仏教系大学においては、人を効率的に殺せるような学術的課題はご法度である。資本主義的管理においては、交通事故以上に殺人が行われているが、「パワハラ」という高圧的言動が武器になっているとの意識が少ない。ようやく「パワハラ」などが犯罪として認識されるようになってきているが、相変わらず就職率向上第一の大学においては、世の中ブラックだからそれに馴染めというような訓練を堂々と自称教育者が行っている。このような似非経営学者の存在は大学自体も殺してしまう。

資本主義によって生産性が増大し科学技術が向上し、日本においてはかつての王侯貴族も味わえなかった生活に浸っている人が多数派である。例えば、暑い日にエアコンを入れて冷えたビールを飲むことができる。ところが資本主義とは資本の争奪の戦いであって、勝者がいれば必ず敗者が存在する。極楽を満喫している中でも必ず地獄を体験している者が存在する。果たして自己責任であろうか。国民国家概念によってこの快適と引き換えに兵隊にされ、個人的には何の恨みもない者同士が殺し合いまで演じている。こんなことが永遠に続くならば、ホモサピエンスは人為的に絶滅の過程を歩むことになる。経済戦争の結果である地球に住めなくなるような気候変動も、決して宇宙人が企てたものではないのである。

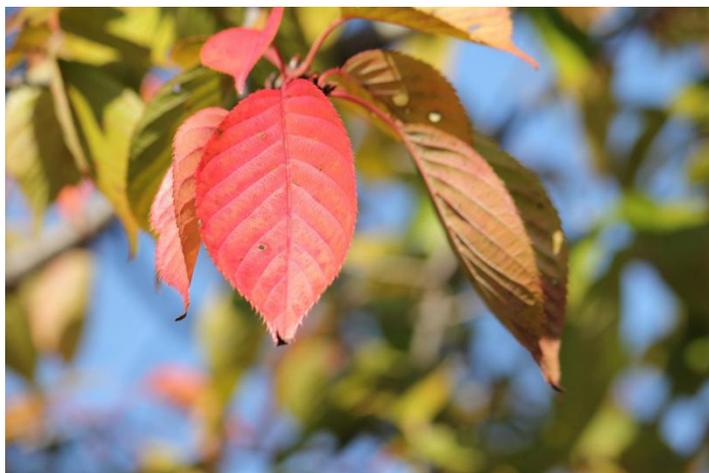
日本のアカデミズムである各種学会においても、ズームに浸食された現実には元に戻ることもなく、身長もわからない人と論争することになっている。これが人間にとって進化した状況といえるのだろうか。緊急避難的で仕方がないからズームにするというのではなく、そのほうが多くの研究者の参加が期待できるとの肯定的選択なのである。自らの知的刺激を経験するために、費用と労役を負担して多くの専門家に会う機会を得ようとしたのが学会活動ではなかったのではないか。アカデミズムも専門家も費用や労役の負担を軽減するのが効率的な学会開催と考えている。特に若い研究者は否定的に考える者が少ない。大学の遠隔授業の世代が研究者になった時には、

「大学とは通うところなのか」「学会が何故対面なのか」というブラックユーモアが現実となるだろう。科学としては進歩かもしれないが、人間としてはリモコンで寝ながらテレビチャンネルを選択する墮落と考える。つまり、このようなことが永遠に続くならば、人間は「博知」でありながら「白痴」化が進むであろう。

人的資源管理論の私のゼミはバーナードの『経営者の役割』を教材とした。同じ分野の経営学の教員から、この大学の学生には無理であるとの忠告も受けたが強行した。結果は無理であった。確かに無理であったが、その無理の中で得たものもあった。それは実学と称して経営事情に興味を示すかもしれないが、その原理、学説、理論に触れることが基本であるという姿勢を理解してくれたことであった。確かに学生からすれば難解な理論よりも実証的なことのほうが実益に適用かもしれない。だからと言って、会計学をやらずに会計ソフトの使い方十分なのであろうか。大学の現状については、学問として確立している経済学部においても、経済は知っていても経済学は知らない教員が自らの経験に基づいた経済学と称する講義をしている。同様に経営学についても、経営を実証的に説明できてもなぜそうなるのかを経営学で解き明かそうとする教員の教育に対する評価は低い。実務経験から狭いその分野においては追従を許さない経営に関する知識がありながら、経営学を知らない教員が経営学を講義している。当然のごとく自前のテキストではなく、出来合いの教科書でお茶を濁している状態である。学生はそれを経営学と誤解している。高校の授業であるならばそれで十分である。経営学として柄谷行人の理論まで広げることなく、マルクスもカントも不要であろう。ゼミ以外の講義については、「人的資源管理論」では日本的経営についても取り上げた。先述の経験において物知りの教員は日本の経営における強みなどは論外で、世界市場において米国やEU、さらに中国と対等に競争できる技術力が必要で、日本の強みを発揮できる土俵を作った「ジャパン・アズ・ナンバーワン」や「セオリーZ」などは頭がないようであった。関心のあることは目の前の仕事の処理と従順な部下づくりであったように思える。これではお隣の国のように教育が「学を習う」から「習を学ぶ」になってもよいのであろうかと、天国の篠原先生にお聞きしなければならない。

いずれにしても私は会社都合による非自発的失業に追い込まれ、一時金として30万円をハローワークから受け取ったが、経営学の教員の責任としてそれで終わらせたくなかった。今は党派に属さずリベラルな立場で私設研究所を立ち上げて権威主義に挑んでいる。つまり、経営学の権威である人から遠くのところで尾を振らずに吠えているのみである。

(しおこうじばし たくぞう)



# イベントのお知らせ (Christmas マーケット)

ひとりごと

新しく始まる次の年に何も光がみえないまま 2022 年が終わろうとしています。なんという事か!! ですが「通信」2021 年 11 月、18 号に投稿しましたドイツカフェみとき屋で、12 月 4 日 (日) 11 時より Christmas マーケットを開催します。コロナ患者が再び増えはじめた事と、京都市内より寒い地域なので是非にとはお誘いしにくいのですが、お知らせします。

私達は次につないでいく為の時を作りたい。  
詳細は FB ドイツカフェみとき屋で!

(ひとりごと)

詳細はFB  
ドイツカフェみとき屋

クラフト、手作り作家の出店

ホットワイン、クリスマス菓子 ドイツケーキ

おいしい食べ物

楽しいステージ  
夕刻にクリスマスの歌  
をうたいましょう!

Weihnachtsmarkt  
クリスマス マーケット

2022. 12月4日(日)

11:00 ~ 17:00

ドイツカフェみとき屋  
TEL (0771) 74-1375(木・金・土)  
南丹市日吉町胡麻障子畑 18-1  
JR胡麻駅下車 北へ徒歩5分

感染対策に  
ご協力をお願い致します。

# 「グリーン・トランスフォーメーション戦略」とはなにか +NHK の姑息な世論調査

青水 司

岸田首相は、8月24日第2回「GX（グリーン・トランスフォーメーション）実行会議」で次のような指示を出しました。

- ①テロ対策の不備が指摘されている東電柏崎刈羽原発など、7基の再稼働を「国が前面に立ってあらゆる対応」をとって目指す。
- ②最長60年への運転期間の延長の検討を、「年末に具体的な結論を出せるように検討を加速する」。
- ③「次世代革新炉」の新增設や建て替えをめざす（しかし、岸田首相は「次世代革新炉」がなにかを示していない）。経産省によれば、革新軽水炉、小型軽水炉、高速炉、高温ガス炉、核融合炉だという（内閣府・原子力委員会『2021年版原子力白書』2022年7月28日、参照）。最も導入が早い革新軽水炉について、2030年代半ばには運転を開始する開発・建設計画を示している。

目新しいことは、

1) ③の革新軽水炉は「3.11後の新基準に適合するもの」と経産省は説明したそう（NPO法人原子力資料情報室より）。何のことはない。再稼働している原発、再稼働を目指す7基と同様で、「次世代」や「革新」とかは名ばかりで、安全性が高いとか放射線放出量が少ないような印象を与えるだけです。

2) 高速炉について：③の多くは10年～15年あるいはそれ以上先をめざしたものです。高速増殖炉は燃料のウランより多くて濃度約99%のプルトニウム（原爆の優秀な材料）の生成が可能で「夢の原子炉」といわれ下記のように原子力大国が開発に力を入れてきました。なお、高速炉と高速増殖炉の異同を説明していませんが、どちらも中性子を高速のまま効率よく冷却するためにはナトリウムなどの冷却材が必要です。

動燃の高速増殖炉・もんじゅ（原型炉）は1991年試験運転開始したが、1995年発電開

始後すぐナトリウム（水に触れると爆発する危険のある冷却材）が漏えいし、火災を起こしたが一連の情報を隠ぺいしました。2010年運転再開したが、すぐ炉内中継装置の落下事故により運転停止となり、3.11発生にもかかわらず続行し2016年ようやく廃炉が決まりました。1983年の着工から30年以上、1兆円以上も国民の税金を浪費しました。原爆の優秀な材料プルトニウムを求めて大金をまだつぎ込むのでしょうか。以下のとくにアメリカの政策にも反して高速炉にしがみつ়るのは原爆との関係で異常です。

米（1983年核拡散防止政策のためカーター政権が原型炉建設中止、1994年クリントン政権は実験炉も閉鎖）、英（1987年原型炉がナトリウム冷却材事故で細管破断、2年ほど運転停止後閉鎖）、独（熱中性子炉を改造した高速増殖炉がナトリウム事故で閉鎖。原型炉は住民の反対と運転資金不足で91年計画中止）、仏（「フェニックス」（原型炉）、「スーパー・フェニックス」（実証炉）1986年世界で初めて運転させたが、トラブルが続き1990年運転停止、1998年閉鎖）の原子力先進国さえ90年代に撤退したのです。米以外は冷却材ナトリウム事故で撤退しました。なお、2008年高速炉：実証炉の研究開発で日米仏合意したが、2009年には凍結しています。

以上から問題は第1に、一言でいえば原発拡大・原爆化路線の推進です。悲惨な広島・長崎原爆被害を受け、「原発大国」として54基も設置して福島第1原発過酷事故を起こしました。また、チェルノブイリ事故があり、いま原発15基を設置する「原発大国」ウクライナの原発が3基もロシアに攻撃されています。今こそ真っ先に原発廃止にかじを切り、反核（反原爆・反原発）へ世界に範を示すのが被爆国・原発過酷事故国の責任でしょう。口先ではロシアによる原発攻撃に全EU加盟国などと42カ国で抗議するが、原発を増やすのはもちろん、「核共有」を言ひだし原爆まで欲しがるのは愚かです。

第2に、岸田首相は自民党総裁選挙にあたって、将来的には「再生可能エネルギーを主力電源化し、原発への依存度は下げていくべきだ」、とくに再生エネルギーを重視して「環境問題のリーダー国に」すると主張していました（岸田文雄『岸田ビジョン』講談社、2020年）。ところが、今年7月の参議院選公約では、「安全が確認された原子力の最大限の活用を図る」と後退し、今回はさらなる後退です。福島第1原発過酷事故以降、歴代首相は原発への依存度の低減を掲げており、新增設や建て替えの検討を明言したのは岸田首相が初めてです。岸田首相は“電力のひっ迫”を上げていますが、外国依存のエネルギー政策では電力のひっ迫はいつでも起こりうるし、原発廃止にかじを切り、再生可能エネルギーへの転換に傾注せねば脱炭素への道は切り開けません。『岸田ビジョン』も票欲しさのアドバルーンにすぎなかったのでしょうか。

第3に、上記『原子力白書』によれば、2021年6月「グリーン成長戦略」、10月「第6次エネルギー基本計画」で原発の電源構成を20～22%程度と位置づけています。言葉だけ「グリーン」で、安全になり放射能が少なくなるわけではありません。3.11などの事故時はもちろん、日常、原発が二酸化炭素を出さないのは「発電時だけ」で再生可能エネルギーよりはるかに二酸化炭素を放出します。さらに最長60年原発を増やせば事故

も増える可能性が大きくなるし、放射能の放出も増えます。

なお、朝日新聞とNHKの世論調査の結果について紹介します。

・『朝日新聞』（8月27,28日実施）

質問：原発についてうかがいます。あなたは、国内に原発を新設したり、増設したりすることに賛成ですか。反対ですか。

賛成 34

反対 58

その他・答えない 8

---

・NHK（9月10～11日実施）

質問：原発の政策をめぐって、政府は、次世代の原子炉の開発や建設を検討する方針です。

この方針に賛成ですか。反対ですか。

賛成 48.4

反対 31.6

分からない、無回答 19.9

資料：「NPO 法人原子力資料情報室」（<https://cnic.jp/45667>）は世論調査に関して以下のようにメディアに要請しました。

「『次世代』や『革新炉』と呼ぶと、あたかも安全性が飛躍的に高まった未来の原発であるかのような印象を与える。しかし現実的に建設されうるのは、現在存在する原発、またはそれが若干改善された程度のものになる。そのため、「次世代」や「革新炉」と表記することは回答者に不要な先入観を与えてしまうことになる。つまり、アンケートとして適切なのは、単純に原発新設について質問した朝日新聞の質問文だったということになる」というのが結論部分です。

（あおみ つかさ）

# ドイツ：政党を横断する 社会運動の試み（序）

照井日出喜

2010年代の後半、ドイツでは、左派中道諸政党を基盤とする政治家およびその周辺に位置する知識人との間で、政党を横断する社会運動を組織しようとする試みが開始された。自由民主党からの政治家も含むがゆえに、「左派連合」とは必ずしも呼ぶことができないと思われるが、青年たちの参加という要因を伴うがゆえに、ともかくも「停滞気味」の政治状況に風穴を開けようとする運動であるには違いなく、さまざまな紆余曲折を経て、運動が展開されつつあるようである。

彼らのグループの直接的な刊行物は、当面、以下の三点であり、この「通信」誌上で、来月号以降、さしあたって最も新しいパンフレットである『再出発』（2022年）から「逆行」して、『君たちにはなんのプランもない』（2019年）、『立ち上がれ』（2018年）へと、その論点および論争点を追跡する予定である。

じつのところ、最近の左翼党の選挙戦における不振とも関わって、こうした試み自体、ドイツにおける左派勢力全体の状況とかなりの程度まで関連することは明らかであり、その意味では、とりわけ2010年代からの政治状況について、範囲を相当に広げた展開が必要なのであるが、わたし自身の関心はその部分に集中することを妨げるがゆえに、当面、3点のパンフレットを中心に、彼らの意図や現状の分析および批判、といったものを中心に「追跡」することに限定せざるを得ない。

1. 『再出発 危機と戦争に抗して（《Neubeginn Aufbegehren gegen Krise und Krieg》、126S. Hamburg 2022）』 このパンフレットの原稿は、ロシアのウクライナ侵攻が開始される前の年、2021年に書かれているが、執筆者の多様さとともに、どのようなメンバーがこの運動に関わっているかをも示すものとなっている。

**執筆者：**

ペーター・ブランド（1948年生、歴史学者、かつての連邦首相ヴィリー・ブランドの長男、**社会民主党 [SPD]**）

ライナー・ブラウン（1952年生、ジャーナリスト、平和運動家）

ミヒャエル・ブリー（1954年生、哲学者、ローザ・ルクセンブルク財団理事長、**左翼党**）

ダニエラ・ダーン（1949年生、作家・文筆家）

フリードリッヒ・ディックマン（1937年生、作家、文筆家）

ラルフ・フックス（1951年生、文筆家、**緑の党**）

ディーター・クライン（1931年生、経済学者、**左翼党**）

ミヒャエル・ミュラー（1948年生、自然保護活動家、**社会民主党 [SPD]**）

ヘルムート・シェーファー（1933年生、言語学者、**ドイツ自由民主党 [FDP]**）

インゴ・シュルツェ（1962年生、作家。2013年の連邦議会選挙の後の「大連立に抗して」運動  
〔後述〕の提唱者の一人）

アンチェ・フォルマー（1943年生、緑の党の創業者世代の一人、文筆家、神学者、1944年7月

20日の対ヒトラーの挫折したクーデターの首謀者＝実行者の一人であったクラウド・フォン・シュタウフェンベルクに関する『シュタウフェンベルクの同志たち (Stauffenbergs Gefährten, München 2013)』の共著者の一人。緑の党)

ガブリエレ・ツィンマー (1955年生、2004～2019年ヨーロッパ議会議員、左翼党)

NATOの「枠内」にあるドイツにあって、NATOおよびアメリカの支配に抵抗しつつ、もちろん、ブーチン一味の侵略行為にも反対する、というスタンスは、さしあたって、1990年以降の経過に関わる以下の一節にも読み取ることができる。

「まさしくいまのこの時期において、1989/90年に開かれたチャンスが無に帰したことを、わたしたちは苦渋に満ちて確認せざるを得ない。ヨーロッパ全体に関わる安全機構、つまりは、『ヨーロッパの家』を共同で構築していくという課題は、基本的には、NATOという西側の諸機構が拡張されることに取って代わられた。すなわち、アメリカによって支配される世界秩序を貫徹するための西側の帝国主義的戦争(imperiale Kriege)が、日常茶飯事のこととなったのである。同時にまた、ロシアと、ソ連から派生した幾つかの国々においては、ペレストロイカとそれに続く数年間の民主主義的な成果は、ひたすら解体の憂き目を見ることとなった。じっさい、ブーチンの支配のもとでのロシアの指導部は、ついには独自の帝国主義的な反＝憲章を作り上げるにいたったのである」(7ページ以下、この部分だけはロシアの侵攻の開始後に執筆)。

2. 諸世代財団青年協議会『君たちにはなんのプランもない、だから私たちがそれを作るのだ。私たちの未来を救うための10の条件 (Der Jugendrat der Generationen Stiftung 《Ihr habt keinen Plan, darum machen wir einen. 10 Bedingungen für die Rettung unserer Zukunft 271 S. München 2019)》、クラウディア・ランガー編)』

執筆者：

フランツィスカ・ハイニシュ (1999年生)、ザラー・ハディ・アンマー (1999年生)、ヨナタン・グート (1998年生、緑の党)、ヤーコブ・ネールス (1994年生)、ハンナー・リュッパート (2001年生)、ルーツィエ・ハメッケ (1996年生、2019年、最年少で緑の党のザクセン州議会議員となる)、ニクラス・ヘイト (1997年生)、ダニエル・アル＝カーヤル (1994年生)

基本的には、環境問題と民主主義の徹底を主要なテーマとする青年組織であると思われるが、街頭でのデモ、さまざまな集会や討論会の開催、上記のパンフレットの発行などによって、「再出発」グループとは共闘関係にある青年グループとっていいであろう。「再出発」の主要メンバーがほとんど70代以上であるのに対して、こちらは20代であり、パンフレットの執筆当時、何人かは20歳になったばかりである。

2022年7月7日、ドイツ第二テレビ(ZDF)の番組で、リフカ・ランブレヒト(政治学専攻学生、21歳)が、連邦議会首相ショルツを含む7人の座談会に参加し、ショルツ首相と論戦を展開する。その模様の動画は、青年組織のHPである[Generations Stiftung](https://www.generationenstiftung.de/)に採録されているが、テレビで公開されるこうした座談会で、首相が青年組織の代表と論戦を交わすこと自体が、まずは興味深いことには違いない(彼らの論戦の主要な論点については、近く「通信」に掲載予定)。

世界のエコロジー問題は、当然のこととして、彼らの主張のなかで大きな位置を占めるものであるが、原発問題については、ドイツ国内ではある程度まで「解決済み」のものと思われ、つまりは、現在稼働中の最後の3基の原発も、2011年の福島の大惨状のゆえに2022年末までには閉鎖されることとなっていたから、2019年のパンフレットでは主要なテーマとはなっていない。しかし、ブーチンによるウクライナ侵攻を受けて、ドイツのエネルギー事情が困難な局面へと陥れたことから、連邦議会では、今年の11月11日、CDU-CSU(キリスト教民主・社

会同盟)、AfD(極右、「ドイツのための選択肢」)および左翼党の野党3党(黒・黒・赤)の反対(CDU-CSUは、2024年12月31日までの稼働延長を主張するが、否決される)を押し切って、2023年4月15日まで、稼働中の3基の原発の運転の延長が議決された。したがって、今年の後半から、原発問題は新たな論争のテーマとなっており、この青年組織においても、当然、批判的な議論が沸騰したことであろうと思われる。

### 3. ライナー・バルツェロヴィアク『立ち上がれ(《Aufstehen》、142S. Berlin 2018)』

「立ち上がれ」運動は、すでに2021年には挫折したものとされており、それを受けて、『再出発』が出版された。「立ち上がれ」の成立から挫折へといたるプロセスについては、わたし自身、まだともに追跡してはおらず、左翼党のザーラ・ヴァーゲンクネヒトのイニシアティブによって開始されながら、彼女がこの運動から実質的に離れることになるのには、現在のドイツの左派運動全体の動向が影響しているであろうことが推測されるのみである。

挫折とは言われながらも、そのHP ([aufstehen – Die Sammlungsbezugung](#))は依然として存在しており、そこには設立趣意書等もそのまま掲載されている。2022年7月9日のベルリン・ブランデンブルク門の前での行動の写真は、なおこのグループが活動を停止してはいないことをうかがわせる。

#### ・ 2013年の「大連立に抗して」運動から現在へ

『再出発』のメンバーであるインゴ・シュルツェは、1993年以降、ベルリンで作家として活動しており、その作品は30カ国語に翻訳されているとのことである(ただし、わたし自身は未見)。彼が「大連立に抗して」運動の提唱者の一人であった2013年の連邦議会選挙の結果は、以下の通りである。

	得票率	議席
キリスト教民主・社会同盟(CDU-CSU) (黒)	41.5%	311
社会民主党(SPD) (赤)	25.7%	193
左翼党(Die Linke) (赤)	8.6%	64
緑の党(Die Grünen) (緑)	8.4%	63
自由民主党(FDP)	4.8%	0
AfD(極右、「ドイツのための選択肢」)	4.6%	0
その他		

6党のなかで、FDPとAfDは5%足切り条項に引っかかって議席の獲得はならず、結果として上位の4党のみが議席を得ることとなる。したがって、もし赤・赤・緑が連立すれば320議席となり、黒の311議席を抑えて、理論的には政権を獲得することができたはずであった。もちろん、かなり決定的にCDU-CSUが第一党であり、数字からすれば、CDU-CSUがどこかの政党と連立を組んで過半数を確保する、というのが「常道」には違いないのだが、この結果を受けて、連立政権の形成をめぐるのは、かなりの論争が展開されることになる。

黒(CDU-CSU)と赤(SPD)との「大連立」に反対する運動のイニシアティブを取った人物の一人がインゴ・シュルツェである。少なからぬ文化人たちも最初の賛同署名を寄せていたのだが(たとえば、「再出発」のメンバーとしては、ダニエラ・ダーンやアンチェ・フォルマー、さらには、社会哲学者のオスカー・ネークトや女優のハンナ・シグラ)、しかし、すでに選挙前から、SPDの多くは左翼党との連立を拒否しており、選挙結果を受けて、SPDの内部からも、当然、「大連立」に反対する声は上がったものの、結局は、631議席中504議席を占める黒と赤との「大連立」が成立することになる(2018年までの第三次アンゲラ・メルケル政権)。極右の

AfD がまだ跳梁し始める前の時期ということもあり、AfD の連邦議会の議席がゼロに収まっていたということもあるにはあるが、しかし、いわばポテンシャルとしては、ドイツでは左派・中道政権が成立する可能性がある（あった）ことを、この年の連邦議会選挙は示している。じっさい、ベルリン市州では、この赤・赤・緑による州議会の連立政権（いわば「革新都政」）が現在も維持されているのであり、左派・中道政権そのものがまったく存在しないわけではない。黒・黒・黒 100% で可能性がゼロであるような国とは、いささか棲む世界が異なるようではある。

とはいえ、2017 年の連邦議会選挙になると、状況は異なった様相を呈する。

	得票率	議席
キリスト教民主・社会同盟 (CDU-CSU) (黒)	33.0%	246
社会民主党 (SPD) (赤)	20.5%	153
左翼党 (Die Linke) (赤)	9.2%	69
緑の党 (Die Grünen) (緑)	8.9%	67
自由民主党 (FDP) (黄)	10.7%	80
AfD (極右) (黒)	12.6%	94
その他	5.0%	

なによりも目につくのは、AfD (極右) が連邦議会選挙で 94 議席を得るにいたったということである。

いわゆる難民問題との関連で、主として 2015/2016 年には、AfD を中心とする排外主義的な「外国人は出て失せろ！」のデモが激しい勢いで繰り返され、それに対抗する「カウンター・デモ」も、各地で決行されていた。わたしの知人の一人は、プロテスタント教会で亡命申請者たちの保護活動に挺身する人物であるが、彼の話によると、流血の事態が惹き起こされても不思議でないという絶望的な不安が、つねに付きまとうほどの凄まじい対立関係が起きていたにも関わらず、ともかく市民たちからの想像を遥かに超える、驚くほど高額な献金が亡命申請者たちのために寄せられ、かつ、「カウンター・デモ」には、普段はそれほど政治的ではない人びとも、多数、参加しており、ともかく「”zivilisierte Gesellschaft” (非暴力的で文明的な社会) を守るのだ！」という意思表示が強力になされ続けたということであった。彼のような活動家たちは、人びととのそうした熱意に励まされつつ、ここで言う意味での”Zivilgesellschaft”が、多くの人びとにとって絶対に守るべきものとして存在していることを確信しながら、運動を展開することができたということである（当時の第三次メルケル政権の外務大臣は、SPD のフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤーである）。

いずれにしても、排外主義的な勢力が議席数では左翼党や緑の党を抑えて、連邦議会でかなりの位置を占めるにいたったという事実は、昨年 2021 年の連邦議会選挙の結果においても残念ながら引き継がれている。

	得票率	議席
キリスト教民主・社会同盟 (CDU-CSU) (黒)	24.1%	196
社会民主党 (SPD) (赤)	25.7%	206
左翼党 (Die Linke) (赤)	4.9%	39
緑の党 (Die Grünen) (緑)	14.8%	118
自由民主党 (FDP) (黄)	11.5%	92
AfD (極右) (黒)	10.3%	84

2013年および2017年の連邦議会選挙と比較すると、社会民主党がとくに大きく伸びたというわけではなく、CDU-CSUがFDPと極右のAfDのあおりを食らって激減し、同時に、左翼党の敗北（本来ならば5%足切り条項によって議席ゼロのはずなのだが、さまざまな条件を満たすことで39議席を得る）、緑の党の躍進（いわゆる出口調査によると、左翼党からかなりの票が緑の党に流れたのではないかと見られている）によって、赤・緑・黄の連立政権が成立することになる。

緑の党は一応、中道政党として考えるとしても、CDU-CSU、FDP、AfDが、735議席中、過半数を越える372議席を占めているのであるから（FDPは連立内政党であるが）、SPDを首班とする政権といっても、その基盤そのものはそれほど強固なものではない。AfDが左翼党の2倍もの議席を得ていること自体、社会状況としてはかなり危機的な要因を孕んでいるように思われ、しかも、まさしくいまのこの時期、プーチンのウクライナ侵略に関わるNATOとの関係においても、つまりは、ヨーロッパがアメリカの支配に従属せぬための主張を提起し続ける勢力としても、左翼党の存在は、本来、重要な意味を持つはずなのであるが、この惨状では無力に近い。

「この国の雰囲気は、コロナパンデミーによってはじめて変化したというわけではない。攻撃的な感情、エゴイズム、連帯意識の希薄化が蔓延し、ナチスの信奉者、人種差別主義者、反ユダヤ主義者の言動はますます目に余る状態となっている」（ツィンマー『再出発』、69ページ、強調は引用者）という現実社会の風潮の冷徹な分析は、2021年3月19日、つまりは、プーチンのウクライナ侵攻が開始される1年近く前に書かれた文章においても、すでに目にすることができる。「立ち上がれ」から「再出発」へといたる経過には、こうした社会全体のネガティブな閉塞状況への批判と抵抗があったには違いなく、その批判と抵抗は、現在の「戦争状態」において、さらに先鋭なものとならざるを得ないということであろう（それを実行する主体的条件が存在する所では）。

他方、「政党を横断する」組織が、政党そのものといかなる関係にあるのか、あるいは、いかなる関係にあるべきなのかを巡っては、当然のこととして、さまざまな議論（および批判ならびに無視）が行われている。しかしともあれ、68年世代+αの活動家・知識人と20歳前後の青年たちとの共闘による、反戦と徹底した民主主義をめざす具体的な主張を掲げて活動が展開されつつあること自体、社会運動が現実動いていることの証左には違いない。

（以下、次号）

（てるい ひでき）



# 個体的なもの と 私的なもの

竹内 真澄

このところ、西洋社会思想史のなかで個体的なもの *individual* と私的なもの *private* がどのように重なり、どのように対立するか、というようなことを考えている。

ぼくの記憶では、京都の四条川端下がるの焼肉の天壇に、フランクフルト学派の主要なメンバーが一堂に会したことがあった。J・ハーバーマス、A・ホネット、J・アーナソン、韓相震らと日本の研究者たちがいた。たぶん、2000年代のはじめだったように思う。そのとき、ぼくはハーバーマスとホネットに、かねてから疑問に思っていた質問をなげかけてみた。「マルクスは、個別者 *Einzelne* と個体 *Individuum* を区別していると思うが、あなたはどう思うか」。これにたいして、二人はポカンとした顔をして、「そうだ」とは決して言わなかった。ぼくはぼくなり必死だったから、鮮明に憶えている。

この論点は、いろいろな領域に波及する扇の要のような問題だとぼくは思っている。だから、同意を得られなかったということが、僕にとっては失望であるというよりも、結局は自分自身で考えていくしかないという決意を新たにさせるものだった。

後になってわかったことだが、フランクフルト学派には第一世代から一貫して「労働の社会化」についてのまとまった理解がない。生産諸力が上がっても労働者は解放されない、とか、生産諸力が上がったならファシズムになったというふうに考えているのである。マルクーゼになると、美とかエロスとかに解放の原理を求め、またハーバーマスは労働ではなくて言語的コミュニケーションに自由を求める。つまり、もう生産諸力に依拠することはできないと考える点で共通しているのである。

これらは、20世紀後半の理論展開として、新しい要素をつけ加えた。身体のことを考えさせたし、改めて言語や議会制民主主義の大切さを教えた。だから、よいところがたくさんある。けれども、人間が悠久の歴史の中でどうして個別者 *Einzelne* になってしまうのか。同じことであるが、共同体が崩れて、万人がバラバラな寂しい存在 *Einzelne* になってしまうのはなぜか、どうやったら個体 *Individuum* を再建できるか、ということを深くつかんでいないような気がしてならないのである。

僕らはみな20世紀を経験して今を生きているのであるから、悩みはつきない。その悩みから、皆必死で何かを模索している。ぼくはぼくだ。彼らは彼らだ。それでいいじゃないかと今思っている。

翻って、日本の研究者や活動家が、個体的なことと私的なことをどう考えたか、ということ調べてみた。面白かった。たとえば、林直道氏は、『史的唯物論と経済学 下』（大月書店、1971、89頁）で、若きマルクスの「ユダヤ人問題によせて」1843の結論部分を引用して「現実の個別的な人間が、抽象的な公民を自分のうちにとりもどし、個別的な人間のままでありながら、・・・類的存在となる。」（全集第1巻、407頁）と述べている。だがここで「個別的」とされた箇所は *der wirkliche individuelle Mensch* だから「現実的な個体的人間」と訳すべきであった。マルクスがヘーゲルの個体／個別の区別に神経を使っている点を林氏はまったく理解していない。つまり人間的解放の成就とは何かがわかっていない。

ぼくは学生時代に石油危機のあとで大学に来られた林氏の元気でユーモアのセンスあふれる講演を聞いて、おおいに感激したが、今になって著作を読ませてもらうと疑問なしとしないので

ある。

また、1970年代に関西では『資本論』解釈で権威をもっていたのは見田石介氏だった。なんだか、見田さんを読まぬものは人にあらずといった風潮だったのを覚えている。見田氏に心酔していた友人に内田義彦（『資本論の世界』岩波新書）の方がずっと面白いんだぜと言ったら、読んでいなかったのか曇った顔をしたのを思い出す。

見田氏は、「私的所有者あるいは私人も、また個人であり、人間個人は、共同体の一員でもありうるし、ばらばらな私人でもありうる。個人という言葉は、何か原始共同体や社会主義の成員だけをさすように主張するのは、まったく理由のないことである」（「平田清明氏はマルクスをいかに『発見』するか」『前衛』1970年2月号、44頁）という。つまり、見田氏によれば私人も個人であり、私的と個体的は同じ意味だということである。

どうだろうか。これでは、ヘーゲルの弁証法がなぜ苦勞の末出て来たか理解できないだけでなく、マルクスの一貫した人間的解放思想も理解できないのではないだろうか。林氏も「私的個人も私的でない人間も、みな個人である」（前掲『史的唯物論と経済学 下』177頁）と論じている。

1969年に出た平田清明氏の『市民社会と社会主義』（岩波書店）は私人と個体を区別した稀なものだが、林氏はこれが気に入らなかったようなのである。林氏は見田氏が犯した誤りを繰り返している。最後に不破哲三氏にも触れておこう。氏は、『反デューリング論』1878のエンゲルスの

の「否定の否定」にかんする説を擁護しながら「生活手段については私有財産を認めるということが、社会主義の原則に属する社会主義社会の当然の内容だということです」（「エンゲルスと『資本論』(5)」『経済』新日本出版社、1996年2月号、145頁）と論じている。氏は、マルクスが「個体的所有の再建」とした対象が生活手段であると解し、かつまた、その場合の個体的所有を私的所有と言い換えてもよいと考えているわけである。

つまり、私的なものは個人的なもので、ふたつは同じだということになっているわけである。しかし、これら3氏の言語感覚をぼくは疑っている。彼らは西洋社会思想史のなかでの「個体的」と「私的」の鋭い相克を検討していない点で、またマルクスがその正当な継承者であったことを見過ごしている点で、古典を読めていないように思う。

こうしてみると、フランクフルト学派の人びともまた日本の権威をもった研究者や活動家も、案外大地から浮遊した感じで現代世界を生きている。人の振り見てわが振り直せ、ということなのだろう。

(たけうち ますみ)



## 【近況短信】

# ファンタジーにある「古い」

## —団地タクシー奮闘記（スーパー老人の巻）—②

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは、今年74歳になったキャリア4年の老人です。このタクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー(老老)相互扶助の物語です。順を追ってお話したいです。というか、お話したいことがヤマほどあって、順番をつけるのに苦労しています。それほど、このファンタジーはドロドロ、シャワシャワしています。

夢のようなスーパー老人が本当にいるのです。お隣のM市に在住ですが、この団地タクシーの運転手になって早や2年が経とうとしています。お酒をやらないので、居酒屋へ誘うことは諦めています。本当に残念です。もう、心底残念で仕方ありません。が、もちろん本人は泰然としています。

「どうして、この団地タクシーの運転を買って出たんですか？」  
「たまたまM新聞を読んでいて、“若い力もとむ”という記事が目に入ったから…」  
「……………」？」（確かに、M新聞からの取材があつての記事でしたが、“若い力”とあつたはずですけども…彼は私と同年齢でした）  
「運転手のなり手がいなくて困ってたんです、本当に助かります」と、わたし。

この彼、国境ならぬ市境を超えて来るなど、そこからして「スーパー」老人です。私たちの団地まで、自転車ですべてやってきます。ロードバイクというやつで、30分以上も時間をかけてきます。立派なクルマを持っていますが、自転車ですべてやってきます。そこがまた、「スーパー」なのです。

かつて、私が中国人留学生から質問されたことがありました。それを苦々しく、また懐かしく思い出すのです。

「先生は、大学の先生、お金持ってる、どうして自転車乗ってる、どうして？」（ここは、カタコトの日本語です、文字ではその詰るような口調を伝えられないのがもどかしい！）

中国といえば、かつて天安門広場を大勢の（というか群れを成した）自転車が走行している場面が思い起されます。質問した留学生にとっては、クルマは「西側」の高級・耐久の消費財であつて、自転車は庶民の足だったのです。その自転車に、当時私も乗っていました。ただ、痛恨の極みは、私がクルマを持たないだけでなく、免許証（資格）も持っていなかったということです。

「西側」の落伍者なのです。

クルマはもちろん、運転免許証も持っていないながら自転車でやってくるなど、私などには理解を超えています。クルマの上位に自転車がランクされているのでしょうか。悔しいのですが、ここにも、彼は通念を超えた「スーパー」の立ち位置にあります。

改めて、実際に、居るのですね、スーパー老人が。

料理だけでなく、裁縫、木工、金属加工などもプロ並みなのです。団地タクシーの修理もこなします。これはもう「スーパー」の三段跳びです。

こうして振り返ってみると、私が段々小さな存在に見えてきます。老人を見る目が変わってきます。「人並み」の老人が急に弱弱しく、哀れな存在と化します。住民は、そうとは知らず精一杯に頑張っているのですが、どうしても見劣りしてしまいます。いままで多少の凸凹はありましたが、とにかく皆平等の世界でした。そこへ、「スーパー老人」の参入です。

これは、あれかな、マルクスの「価値形態論」かな、と思い至りました。一般的等価物たる貨幣と、相対的価値形態にあるその他商品とへの両極分化、非対称性の確立です。もちろん、「貨幣」はかの「スーパー老人」であり、「その他商品」は私たち住民である“さりげない”老人たちです。

ここには、誰ひとり、悪人は登場しません。「スーパー老人」が憧れの存在になったことを含めて、皆、善意の人たちばかりです。

この日、いつからか林に住みついている猫3匹が、私が運転する団地タクシーを眩しげに見つめていました。外の空気は冷たかったのですが、なぜかホッコリしました。

でも、「スーパー老人」が、「団地タクシー日報」（乗客名と行き先を記載するものです）の日付を間違えて記載したのを発見すると、心の中で「ガッツポーズ」をとり、妙に安心する自分があることに、「残念ながら」ホッとしているのです。

\* 「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

(つづく)

(みやざき あきら)



# 階級構成と個別者 Einzelne

竹内 真澄

人が自分をどの階級に帰属すると考えようと、統計上の階級は客観的に存在する。マルクスは、19世紀中盤のフランスのボナパルティズムの背後に分散された小農民が存在すると述べている。統計的に小農民は階級であるものの、彼らには自らを組織する結社をもたなかった。

現代日本では、階級構成 class composition を語ることはできるけれども、組織された階級に結集しているわけではないから、階級構成から階級構造 class structure を引き出すことは、部分的にしか、できない。

労働力の商品化はどんどん進行する。すると、賃労働者階級に統計的に属する者は、先進国では8割から9割に達する。この意味で、労働者階級は大量化する。だが、それは一枚岩ではなく、内部でますます個別化 Vereinzelung する。だから、即自的階級化と対自的階層化が平行して進む。

マルクスが古くなったと言われるのは、だいたい、このことを指している。「たえず膨張しながら、資本主義的生産の機構そのものによってますます、訓練され、統一され、組織される労働者階級の抵抗もまた増大する」というが、現実とは違うじゃないかというわけである。だが、よくみるとこの文章は、数が増えれば、一枚岩になるとも、抵抗が増えるとも言っていない。「機構そのものによってますます、訓練され、統一され、組織される労働者階級」、ここで切れており、その抵抗が増大すると読める。つまりアンジツヒな次元では「訓練され、統一され、組織される」。コンビニールトされるという次元ではそうだ。そのうえでその階級の「抵抗が増える」と言っているのだ。ただし「抵抗」は様々な方向や様々な形態となって増えるのであって、一本化するというわけにはなかなかいかない。

様々な抵抗を一本化させるものはあるのか。マルクスは、「国民のなかの一部分が、他の部分の隷属化のために自分が利用されていることを許しているかぎりだけで、つまり民衆の無知が支配しているかぎりだけで、階級支配は存続できる」（ヨハン・モスト原著、マルクス加筆・改訂、大谷禎之介訳『マルクス自身の手による資本論入門』（大月書店、2009））と言っている。「民衆の無知」は、決して高学歴化によって単純に乗り越えうるものではない。むしろ、高学歴化は必要条件だが、十分ではなく、多くの場合、高学歴化は個別化 Vereinzelung の梃子なのである。

労働力の商品化のために人は、学歴や企業規模や所得や住宅や年金を目指し、維持しようとする。そして、これらの属性が今度は一定の階層をもたらすので、これのうえに階層ごとの意識が生まれる。それが「一部分が、他の部分の隷属化のために自分が利用されている」状態である。それが「無知」だというのなら、「豊かな社会」「一億総中流社会」「バブル経済」「バブル後の社会」「新自由主義」にはそれぞれの「無知」の諸形態が対応しているだろう。

これらの様々な形態の「無知」と対決することは、きわめて楽しい学問的行為である。個別者 Einzelne から個体 Individuum に転化するということは、絶えず「無知」の諸形態に対決することを伴う。これが結社の次元を媒介することによってはじめて、階級構成は階級構造に組み替えられるのである。

(たけうち ますみ)